日本醫史學雜誌

(復刊第1號)

第5卷 第1號

昭和29年3月1日發行

復刊の辭内	Щ	孝	(1)
原 著 奇樓(ゲール)管考・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	崎野	孝	三···(3) 佐···(13) 操···(19) —···(43) 榮···(51)
報 告 明治初期の日本の醫學(第18囘日本醫學會課題報告要旨)······			(27)
史 料 緒方洪庵歌集(1)			(57)
雜 報 醫史學會役員・總會豫告(2) 例會記事・明治前日本醫學史 近況(26) 執筆者紹介(41) 國際醫史學會議・新指定文化財 版(42) 醫史學講座設置校一覽(84)			

通卷第1335號

日本醫史學會

卷數變更について

一月號より名稱を「日本醫史學雜誌」と改めたが、號數はもとのも」のま」の通巻數を以つて算し、 昭和十九月十二月號に至つて休工のま」の通巻數を以つて算し、 昭和十九月十二月號に至つて休工のま」の通巻數を以つて算し、 昭和十九月十二月號に至つて休工のま」の語との通巻數を以つて算し、 昭和十九月十二月號に至つて休工の話との通巻數を以つて算し、 昭和十九月十二月號に至つて休工のである。

今回、復刊するにあたり、「中外醫事新報」以來の通巻數のみを今回、復刊するにあたり、「中外醫事新報」以來の通巻數のみを明確第四巻第十二號(昭和十九年十二月發行の第一三三四號)まで毎第四巻第十二號(昭和十九年十二月發行の第一三三四號)まで毎年の第十二號(昭和十九年十二月發行の第一三四號)まで毎年の一號を第五巻第一號とすることに改めた。

この巻數變更は昨年九月の役員會の 決議によつて定められたも

のである。

投稿規定

- 本誌の論説は再投稿又は轉載を謝絕する。
- 二、本誌に投稿しようとする者は會員たることを要する。
- を投稿者の負擔とする。
- 四、別刷は十部に限り無料贈呈する。實費を負擔されても十部以上はできない。
- 五個内とする。
- 原文のまゝとする。漢文は白文または讀下しにすること。六、原稿は縦書、平かな、新かな遣いとし、引用文は『』を附し
- 七、原稿表紙には必ず英文題名及び著者名をローマ字にて附する
- 特別の場合のほか校正は編集係が行う。
- 九、原稿の載否、掲載順序は編集係に一任のこと。
- 十、原稿は書留郵便を以つて本學會編集係宛郵送のこと。

に 日本醫史學雜 誌の復刊第 號をおくることが出來たことを、 先ず會員諸兄とともに喜

態 n 本 を 日 まれたことは今も忘れ得ないことである。 は悪化 戰 顧 **B**史學雜 奪い去 本醫 みれ 争の 災 史 ば私立獎進 り、 洞 誌 學會幹部 は昭 と改題され 會 以來今日 が新新 和二十年春の空襲により昭 醫 發 0 足 會の機關誌として本誌の前身たる中外醫事新報が發刊され 疎開その他 に至るまで復刊することが出 て昭和二十年休刊の止むなきに至る間、實に一三三四號を重ねたのである。 、中外醫事新報はそのまゝ機關誌として機承され、遂 の事情が重 和二十年一月號 つて、 ある時は學會の活動さえも停止 來なかつた。この間、 (第一三三五號)の印刷半ばにして、 物資は不足し、 に昭和 て以來、大 存續 年 正 四

は 前理事長 からの謝意を表する。 Щ 崎 佐 博士は 2 0 戦前戦後の難局 1= 際 U 十數年の間本學會を主宰され たことに わ n わ n

の復 年七月 刊 は、その第 は からずも私は山 に課 はせられ 崎 た大きなことがらであつた。 博士のあとを承けて理 事長に対 就 任 1 たが、 每 月 0 例 會開 催 本 誌

十年にし いに本學會幹部の協力と會員諸兄の支援を得て、 も本 て機關 誌のような特 誌 の復刊をみることが出來たことは、本會にとり幸いなことである。 殊 な學術雜 誌 の運營は頗 昨年九月か るむずか ら毎 月例 今後とも本學會の 會を開き、また、 た こと

昭和二十九年二月

層

協力を

願う次

第である。

長內山

理

事

東彌惠治

日

時 昭

月二十八日(日)午前十時開會

東京大學

醫學部本館

1

東大赤門より入り

正 士

面

0

建物 講堂

0

町。

和

+

九年度總會を左記

より開

催

する。

總

會

豫

告

阿知波五郎 平太 榮 長谷部言人 攝三

三比龍廼企野 大矢 **彦太郎**

全節

岡西 藤中杉井野 爲人

海 場 場 場 場 り 場

大久保利謙 浦伊

會長 東京都文京區本富 內 山

蘭學時 代と大槻玄澤の 位

評議員

勝岩赤松

金芳

葆精克見

佐國川王伊青藤友井丸良木

緒方知三郎

政乾

特別

講演

癩病史 大 內 矢 Ш 孝 全

開催(會費千圓)。 所宛申込まれたい。 懇 親 會 講演發表終了後、 出席希望者は三月廿 東大病院 內 Fi. 好 日までに本會 仁 會食堂に 於て 事

品點數約五百點。 文獻展示 會場附近にて醫史學史料の展示卽賣を行う。

出

廣暉田清瀬峻中水

松次郎

藤太郎

德行 博嚴

美實

連絡されたい。宿舍及び乗車券の斡旋は學會としてはしな ブ お總會に關する一 ログラム は 般演題決 切の 、定次第、 問合せは本會事務所準備係まで 印刷送 付 す る。

五士

君 君

節

たか、 その中でも特に面白い一章であつたに相違ない。こうでは 書」そのものが驚異の産物であつたのであるが、 擧げられて居り、 力 では之を如何に取扱つたかという如き問題を略述する。 奇縷即ち今日の乳糜の流れる道が西洋では何時頃發見され 相當多くの注意を喚んだことゝ察せられる。尤も「解體新 はかなり大きい部分を占めている。この問題は更に翌年の 解體新書」に於て詳述されたのであるから、 安永二年に杉田玄白の出した「解體約圖」に『華人未ダ説 ル 如何なる形で我が國に傳えられたか。 所ノモノ』として大幾里兒、 しかもこの短い一編の中で奇縷管の説明 門脈、 奇縷管の三者が 當時 その後我が國 奇縷管は の醫界に

×

「解體新書」の卷の一、格致篇に

テ成ル者也。成レバ則チ液道ヲ行キ奇縷科臼ニ會シ、漸『奇縷。其狀乳汁ノ如シ。是レ飲食腸胃ノ間ニ消化シ

右の文の液道は今日の乳糜管の腸間膜内を走つている部

小川鼎三

であるが、奇縷即ち乳糜の流れる道は次の如くであるといそれで第二十一篇は同書の卷の三、下』膈膜及び液道篇ク血トナル。詳ニ第二十一篇ニ見タリとある。

也。 下膈膜ニ取ル。 ル者有り。 チ奇縷ヲシテ反リ下ラザラシムルカ爲メ也。 テ大ナル者、名ヲ二品液道ト曰フ。二道共ニ瓣有リ。 者、名ヲ一品液道トロフ。又タ機里爾ヨリ出テ、再會シ シ其管腸ヨリ出テ機里爾ニ連リ、 此二始ル。之ヲ機里爾ニ傳へ上テ奇縷科臼ニ入ル也。 白ク、下膈膜二襲ノ間ニ在リ。是レ奇縷腸ヨリ出ル 液道。 之二附屬ス。 數條ノ細薄管ニシテ支別即チ絲 液道ハ、 其奇縷ト水ト、 之ヲ導テ同ク心 彼此相會 共ニ原ヲ腸及ビ が如 歸 又タ水道 テ シ セシムル 大 ナ 其色 乃 蓋 12

分、下膈膜は腸間膜、機里爾は淋巴腺、水道は淋巴管を意

次に

味する。

縷管ニ上ル。 ノ所ニ在リ。 ノ缺盆骨下ノ血脈ト會ス。 動脈 奇縷科白。 瓣有リ多ク焉ニ在リ。其初メ奇縷科臼 左ノ脇肋ニ長シ、 水道ハ、 大幹ノ後へ左腎ノ分ニ在リ。 奇縷管。 第三篇二見タリ。水ト奇縷ト、此ヨリ奇 其ノ在ル所ハ、奇縷管ノ分也。 是レ液道ノ大會。 其形. 動脈大幹 細長ニシテ嫩。 半月瓣。 ニ屬ス。 其形大ニ 是レ血ト奇縷ト相 奇縷ト水ト相 又タ上轉シ ョリ起ル。 其狀膜 2 テ嚢 グ如 會 ノ如 胸 テ

から 50 照 版 る。 し合せると新書中 七三 それは 縷科 更にその いま手許にあるクル 四及び 田 こゝでは論じない。 は今日の乳糜槽、 機能 獨語 0 アムステルダム版 これらの文には誤譯が所々に見當る ムス の原本 奇縷管は我 大要はよく摑んでいると思 (蘭語アムステルダム 一七四三) 々のいう胸管 と内容を に當

ヲ主 ル。 液道 奇縷科臼 奇 縷ヲ腸 ヨリ受 奇縷下水下此二和 ケ、 奇縷科臼 ス ニ傳フル ル 1 1 7 コト 主

至リ、其血ト清化シ、以テ其血ヲ盛シ、心ニ歸養スル奇縷管ハ、奇縷ヲシテ、上轉シテ左ノ缺盆骨下ノ血脈

コトヲ主ル

訂正 管は内臓を背後から見た圖に では同じなのであろう。 語 附せられているが、之は一七三四年アムステ 鎖骨下靜脈に入るところまでを表した圖には左 ヲ奇縷管ニ輸ス。上ハ奇縷科臼ニ會ス。漸ク化シテ血ト爲 經テ和シ、 からとつたと見われる。 の圖は新書にもクルムスの本にも見られぬ イツ語本ではこの訂正は本圖の中にとり入れられてい とある。 と訂正された。 也」の部分は「解 クル 解體約圖」は 缺盆骨下ニ至リテ の云い譯があるから、 A ス本と同 同書の附 廻腸ヲ歴テ消ス。 體新書」では 「解體新書」の豫告篇と見做されるが、 じである。 圖で液道が腸壁 動脈 約圖 一七四三年アム ドイツ語の原本もやはりこの 二交ル也」とある。 精氣外ニ發シ、 元 0 はつきりと描 原著者の書いた序文中にこの 本文には飲食物が ノ缺盆骨下ノ血脈 から起り、 ス テ から かれ 其液成 奇縷管が 12 n 「動脈 ダム てい 肩に訂 何か他の本 对 ム版 **『化腸** ニ至ル 版 ニ交ル る。 奇縷 正が 左 のド 之 點

重訂解體新書」では新書の液道は湩脈と稱せられ、奇樓

書に同様の意味の言葉が見られるのである。 ダ薄ニシテ細小。 は乳糜、 うまでもない。又名義解の中で乳糜管即ち今日の胸管が『甚 は新書とほゞ同じであるが、 ているのが注目に値する。この文句はクルムスの原本の但 シ 宜シク獸畜ヲ生割シテ以テ明晰ヲ得ベキ也』と記され 機里爾は濾胞、水道は水脈、奇縷科臼は乳糜槽(一 奇縷管は乳糜管と呼ばれている。本文の內容 屍體ニ在テハ則チ壓扁、 譯が一層正確であることは云 容易ニ之ヲ視難

く觸れていない。 見出された歴史を可なり詳しく述べているのであつて、又 三)にも乳糜の道に就ての長い但書が附いていて、之はそ 部 0 ク 少部分を右に述べた如く傳えているが、その大部分には全 の本文よりも内容が豊富である。 知識 分である。 ルムス自身がこの方面の殆ど専門家と稱せられてよい程 ルムスの本には蘭語版(一七三四)にも獨語版 の持ち主であつたことを示すのであつて、興味深い 以下抄譯する。 この但書は乳糜の流れる道が西洋に於て 重訂の名義解はそのごく (一七四

空氣がその中にあると考えた。その後かゝる所見は忘れ rophilus 及び Galenus も見たと思われる。併し彼等は は既に乳糜脈を若い山羊で見た。 He-

は

たのであつたが、 られ、人々は乳糜は腸間膜静脈によつて導かれると考え 至ると考えた。Asellius 自身この脈の終始を明にしなか は度々確かめられた。 て明瞭に示し、それから後動物の生體解剖にてこのこと つたのである。 一六二二年 Asellius が乳糜脈を始め 併し尙人々はこの乳糜脈が肝臓に

ceptaculun chyli 及び Ductus thoracicus を完全に見 Bartholin の書いたものから判る。又一部の人々は Sa の死の少し前一六四九年に同じ物を見たことは 上から下に即ち逆の方向に記載している。 Vesling は彼 血液循環の理論を一層强固にしたのである。Eustachius 用は心臓に歸せらるべきことを示し、かくしてHarveyの つて血液の作られるのは決して肝に於てざなく、この作 よつて彼は乳糜は全部胸管によつて血液に導かれる。從 Receptaculum に運ぶ淋巴管であることを知つた。之に その流れ方からして之は乳糜を肝に運ぶのでなく肝から りの透明な管を詳しく調べ、その中のすき透つた液及び 出した。そして間もなく Thom. Bartholin が肝臓の周 一六五一年 Pequet は乳糜管を遠くまで追跡して Re-一五六四年に馬に於て胸管を見た。そしてその走行を

lomo がその 「傳道書」Cap. XII, 6 (ダビデの子 エル サ

える。 は井の に べているというが、 は銀の紐は解け金の蓋は碎け吊瓶は泉の側に壊れ轆轤 傍に破れん。』に銀色の索の名前で胸管のことを述 王 ソロモンの傳道者予言書第十二章六『然る時 他の人々は之は脊髓を意味すると考

容易でない。乳糜槽及び胸管の形や經過は個體的に甚だ Henninger 生であるストラスブルグの ことが出來る。 で之を見るに有效な方法を考え出した。(その方法)。 又幸に人體でこの管を見た解剖家がある。 てある。そのまゝで(in Natur)見せることが出來る。 終るのを見た。 走り方に就て詳説)余は一度胸管が上部で五本に分れて 授は馬の大腸でも認めた。(こゝで乳糜槽及び胸管の形、 如く散在する。 三時間前に乳汁を與えた動物を生體解剖すると之を見る これらの管は屍體では見られない。その膜が甚だ薄く 中の液が流れてしまうと管が縮むからである。一、 教授も別の方法を發表した。 Breslau. 之は普通小腸で見られるが、Heister 教 腸間膜の全體に腸から始まる白い撚絲の Sammlungen 1721 に發表し Saltzmann 教授は人の屍體 余の以前 併し之はそう の先

異る。

にて太い動脈が骨になつていた。 こゝから網を充分膨ますことが出來た。 この人體にて Winslow のいう裂孔を甚だ明瞭に見た。 纖維が縱に張つていたためである。 れた。
槽は一つであつた。
始め二つに見えたが、少許 ことが出來た。大動脈を上手に取除くと胸管の全體が現 から乳汁を入れて本書に描かれたと同 ltzmannの方法で左の腸骨動脈の上で可なり太い淋巴管 三年前余は五十歳位の男子を公開解剖した時 (所見を詳述)。余は じ形のもの 叉兩側腕及び足 を見 Sa-

述べている乳糜管發見の歴史が正しいものであるか否かを 譯す必要を認めなかつたのも當然である。 った(Bd. 2, 1881)。 教科書はこの問題を可なり詳しく取扱つて居り、 知るために二、三の本を繙いて見たが、 ていたことがわ 内容は大體にクル 以上の如くクルムスは乳糜管の問題に特別の興味を有し かるのである。併し大槻玄澤がその全文を 4 スの云う所と一致していることを知 Haeser 私はクルムス しかもそ の醫史學

その中から面白いと思う數個所を拾 ハーヴェイの血液循環説にとり最大の障碍をなした

0

のは血液が肝臓で出來るということであつたが、この誤れるガレヌス以來の說が如何に根强いものであつたかはい乳糜管の發見に際して反對の立場をとつたことよりも知られる。併し胸管が左の鎖骨下靜脈に注ぐことが判つてガレヌスの牙城は完全に打ち破られたのである。之はハーヴェイの血液循環說(一六二八)より十九年後のことであつたが、以前より多くの重大な發見がその準備をなであつたが、以前より多くの重大な發見がその準備をなであつたが、以前より多くの重大な發見がその準備をなした。乳糜脈の發見はハーヴェイの學說より六年前になした。乳糜脈の發見はハーヴェイの學說より六年前にな

原パヴィアの教授 Gaspare Aselli (Cremona 生れ、1581~1626)が一六二二年多くの醫者の前で、犬の生體に思った。所がこの白い絲の一つを傷けた時乳の様な液と思つた。所がこの白い絲の一つを傷けた時乳の様な液と思つた。所がこの白い絲の一つを傷けた時乳の様な液を思つた。所がこの白い絲の一つを傷けた時乳の様な液を思つた。所がこの白い絲の一つを傷けた時乳の様な液を思つた。所がこの白い絲の一つを傷けた時乳の様な液を思つた。解返し實驗してこの點を確かめ、ア之に必要な條件も明かになつたが、Aselli は尚ガレヌスの説に惑わされて血液が肝で出來ると信じたので乳糜スの説に惑わされて血液が肝で出來ると信じたので乳糜スの説に惑わされて血液が肝で出來ると信じたので乳糜には肝に入ると考えた。肝から出て來る淋巴管が腸間膜

を乳糜脈のつゞきと考えたのである』。 を乳糜脈のつゞきと考えたのである』。

『Aselli の發見は直ちに Riolan (息子の方)によつて人體に於て乳糜脈の存在が知られた。Vesling がおのて人體の乳糜脈を描いたが併し之は膵に入つている(Syntagma anatomicum 1641)』。

『Jean Pecquet (Dieppe 生れ、1622~1674)は Vesling の弟子であるが、一六四七年モンペリエで學生であつた時、偶然犬の心臓を取出した節、上空靜脈から乳汁の如き液が心嚢に出ているのを見て、始めは膿であると思つたが、更に調べて之が腸間膜の淋巴腺からつゞき、左の鎖骨下靜脈に注がれているのを見た。この所見は一六五一年巴里に於て發表された』。

されている」

『殆ど同時に、そしてPecquetの發見を知らずに Joh. 大五二)。Olaus Rudbeck も亦獨立して人體の胸管を見た五二)。Olaus Rudbeck も亦獨立して人體の胸管を見

的新しい發見に屬し、支那醫學で未だ說かなかつたというこれらのことで判る如く、乳糜管の歷史は西洋でも比較

ていたのと事情を異にする。寧ろ當時、世界の新知識に屬他の事柄、卽ち神經、膵、門脈が古くから西洋では知られ

新書の奇縷管即ち重訂 いうことも面白 つである n に は したと云えるのである。 未だ知 たのである。又我が國に最も古く傳えられた解剖書の よつてこの新舊の區別なく多くの學説が一度に注ぎ込ま たのと事情を異にする。寧ろ當時、 られなかつた問題である。 Vesling の本が最初に人體の乳糜脈を示 山脇東洋もその圖を見たかも知 の乳糜管の問題はその後我が國では ハーヴェイの血液循環説の出た時 我が國 世界の新知識 には「解體新書 したと n 12 に屬

×

-(8

如何に

發展したか。

係は壺井純庵、川端玄洞の兩名であつたが、小森玄良(桃塢)等が二十四歳の男の刑屍を解剖した時、我が國にて初めて乳糜管が實見されたと云う。その時の記錄が國にて初めて乳糜管が實見されたと云う。その時の記錄

ア 2 ייי 並 乳糜管ハ別 西 種脈 三叉乳糜管入ノ孔ニ瓣アルヲ觀ル近來彼此共 學起 テ 乳糜囊、 1 3 七 = 拔 リ以來乳糜管ノ觀創ナリ。 此 上テ 等ヲ觀ルコト未曾 乳糜管。 板 ニ安シ鎖骨下靜脈 共二其連續スル所ヲ見 テ コレ 則チ親ク圖 アラズ實ニ = 入所ヲ著見 解剖 ル且 皇

寫シヌ」。

大意」にと記している。又この解剖に参加した波多野貫道の「解觀と記している。又この解剖に参加した波多野貫道の「解觀

諸家解臓シテ未見及ザル所ニシテ當今司解ノ精微 骨下靜脈ニ貫通スル處ヲ諦ニ觀ルコトヲ得タリ 所以ナリ」。 シテ其循 脈(神經ヲ云フ)及ビ血脈 森子ト藤林子トノ二家ニ受テ始テ乳糜管 連日之ヲ解剖シテ全身區物ヲ審視ス特ニソノ訓ヲ小 ヘル所ヲホ 1, 視ルコ 動 靜 トヲ得タリ是 一脈ヲ云フ) 腸 本邦 四 肢 亦 1) ニ至ル 起 蔓延 推白 テ

ビ提綱 = の解剖を見た者の一人江州江頭 テ乃チ乳糜諸道ヲ顯出シ諸子ニ見セシ』めたと云う。又こ が司解の一人であつて、 して乳糜管其他の諸機關を熟視することを得たが あろう。 とあり、 於テ多年 プ圖 卷末にある山崎養達の撰によれば伏見の大橋 この解剖で乳糜管を見たことは恐らく間違な ノ疑惑 ト照シ之ヲ校 一時 冰釋ス」と述べた。 この人が『勉テ解軀 ルニ 纖細異ナル の苗村勘解由 有 ル無キ也、 ノ法ヲ鍛錬 『新書及 元育 いで

别

容易に視難いと云つている。この點に就て我々は大槻玄澤 7 であつて、 內 例 尋常の手段で見ることの出來ない不自然な寫生圖がある。 この圖錄の他の部分を見ても、たとえ『連日』解剖しても、 附圖は果して見たまゝを忠實に寫したかは疑問であつて をはないが、 感ずるので、 われて居り、 て、 の言葉の方がクルム 解體新書」の下膈膜篇の圖とあまりに似て居る點が多い。 たものとしか考えられない。 部に於ける血管の分岐、 えば肺の内部に於ける氣管支及び血管の分岐。肝や脾の 文化九年、 之等は他圖を参照したか或は餘程頭の中で組立 之を實見し得たのであろうと思う。併しその 乳糜管を見るための特別 主眼點の一つが乳糜管に置かれていたことを 藤林、 スのものより正しいと思うのであつ 小森等の解屍は周到な用意の下に行 全身の神經及び血管分布の の手段を講じた様子 如き

に、かくの如く疑われることを豫防するためか、「解觀大要」

見 小森子ノ門人ナリ』とある。 テ稍疑 名ヲ記 若クハ彼解觀ノ席ニ出ザル徒其圖及ビ筆記 ヲ致 シテソ 1 7 虚飾 1 ア ラ ニ非ザル ンコ 1 ノ徴トス。 ヲオソ テ卷末 凡司解 スル者ヲ 觀者 ハスベ

つている。

記そして卷末にこの解剖に参加した五十人の名前が列記さ

IJ° 斯 管ハ上焦ナリ。 所謂ル大機里見ハ中焦チリ。奇縷科白ハ下焦ナリ。 能ク兹ニ至ルナランヤ。 テ三焦營衛考ヲ著シ 造醸スル所以ノ者ナリ。 ニ記べい **攷ヘテ、幸ニシテ其原ニ逢テ其眞ニ符スル** 『余ガ不肖ヲモ顧ミズ、 覽者ソノ 舊解ト同ジカラザ 固ヨリ余ガ尩劣ナル、 茍 = テ以テ審諦 此ノ三ノ者ハ飲食ヲ轉化 六府ノ數ニアラズシテ何ゾヤ… 誠ニ天時ノ然ラ 解體 豈二先賢二超勝 ルヲ訝 フ諸書 = ス。 今ヤ 二稽 ルコト勿レ。余嘗 2 其要ヲ摘シテ 4 スルコ へ目撃・ ル 七 ファ得 所 ート有 ナリ。 奇縷 實・地・ 血 ヲ テ 3

三谷樸は六腑の一つに敷えられ、古くからその本態が疑

洋 問 0 を乳糜槽及び之に合する乳糜脈という工合に解釋し しこの本には膵卽ち中焦に就ては寫生圖 新に解する三焦を實見したと文章の上から考えられる。 あ て之等を見たのであ あるが、 視され 0 解剖 學に合せて、 ている三焦を 乳糜槽や胸管に就 この人は享和一 述 している。 る 上焦を今日 「解體新書」等によつて輸入され か 『目撃ノ實地 一年(一八〇二)の解剖に於て彼の その證 ては彼自身の圖が 據 0 胸 から 二弦へテ』というの 管 な と思 中 焦 な わ を膵、 n 6. るも 0 で果し た。 た西 下 0 併 2 から T 焦

の中で少々紹介すると、先ず中焦卽ち膵の説明中に、「解體發蒙」の議論には中々に意味深遠なものが多い。そ

雖 + 1)0 血造釀 モ、 按 能 亦 ス 以テ カウジ ル ク數升ノ ニ蓋シ ジモャシリの 焦 脾汁 燋タル 水穀 故 ヲ 膽焦 所以 蒸釀 ニ之ヲ 7 2 1 注 魏 悟 テ ルベ 後天 滴 母 ス = シ」 ノ湾培 ル シ テ、 7 1 ラ化 小 膽 بالله 焦 造 ナ IJ 液 ス 1 ル 1

40 2 腎 0 文では今日云う 要 但 = ス 比 亞ア 那ナ ル ス 都米(新書ノ本書) = ル 是 特 v 疏繆 = 殊 酵素作用が述べられてい 二屬 -鉅 ス = ル 2 = ラミの 圖 テ、 ス 實 12 所 此 = ヲ職 = 胃 由 府 るの テ之ヲ觀 ル 1 大サ から 之ヲ 面白 = 等

> 禮私ノ圖説 モ り。 差述ナシト謂ファ、 凡ソ 即 嗟 其 世 圖スル所モ其 ニ於テカ、 粗 糲 ノ儔、 少シ 盡ク 說 荷 = 7 七 スル所モ、 月ヲ 信ズル 蠻 人 刮 1 者 說 スベ 亦 1 以テ 丰 何 云 ゾ 7 1) 思 ヤ 時 フベ 亞ァ 丰 ナ

ヲ瀆ト りの小 たのである。下焦が奇縷科臼に當るということに就ては『經 日 リテ、 條二 奇 格致 ク ク べ。 ク下 血 ル 縷 溝ノ聚會スル所ナリ』という様な理 且ツ 恐ラクハ非ナラ 日フ。 詳 篇 按 4 1 = 潔白ナ 焦ハ瀆 ス 營 水穀 ニスンで 成ルト。コレ = ス の本の第二十二圖 云ク奇縷 經 12 史記ノ索隱 ノ精液 = 新 所說 ラ如 ル 書 奇樓諸道= 出 ヲ シ 視 ニ・シ ル = 略文ナリト 一默縷計發 成レ 液道 10 ン。 所 テ 識べ テ、 二瀆 蓋シ液 此 者ナリ 於テ ハ小渠 ヲ謂 シ 即チ 則チ液道 即チ 發天 0 膵 雖モ、 乳汁 靈液 ヲ譯 フナ ハ未ダ血 經 フ字 が大き過ぎることを難じ イナリ。 り。 所說 ラ奇 亦 シ 1 奇 脈 默 テ 由 穆 釋名 縷計 液道 爾雅 道 30 縷 v 科 述 化 營 12 ナ 1) 白 セ 1 ~ ナ 澮 IJ 似 義 爲 7 澮 べ、 1) 會 又 ス 4. ハ會 H (營 婦 注 協 る。 七 り。 2 新 來

-(10)

焦 50 管ノ全形 = というのは で誤つたのである。 とあるのは胃の後と解すべきで口と後とは音が互に近 いス霧 並 ビ以テ上リ膈ヲ貫キテ胸中ニ布クト『營衛生會篇 『霧當ニ孁ニ作ルベシ。集韻ニ孁ハ雲ノ貌ト云。奇縷 如ク……」 ハ雲ノ起上 「解體新書」 胸管の『全象ハ雲煙ノ起リ上ルガ如シ』 等とあるのを理由にしている。 ル ガ如シ。 の附圖を見てかく感じたのであろ 蓋シ之ニ譬フルナラン。 胃 いの 上 0 口

ハ轉營ノ府 ナル故ニ、 故二中焦ハ製營ノ府ナリ。下焦ハ取營ノ府ナリ。上 ナリ。 之ヲ孤 其名ト實トハニナレドモ、 ノ府ト云フナリ」。 其功績

ハ霧

ノ本字』という工合に解釋している。

四〇 を聖 腎であると記している。 あつた譯である。 る。「解體發蒙」のこの考えは小出龍(君德)の「導窾私錄」 七年一八三六 こちづけの説ではあるが中 書の中の一節と結びつけた者があるの では之に反して上焦は胃中、 にもそのま、採られているから信奉者が 石坂宗哲の「内景備覽」(天保十一年一八 々興味がある。 中焦は小腸中、下焦は 西洋 と好一對であ でも胸管 一天

保

題には更に浣藩醫、 奇縷管を我が國で最初 南小柿寧一(甫祐)の「解剖存眞圖」 に實見したものは誰 れかとい う問 文

> ないが、この推測 が乳糜管を藤林、 に四十餘屍の解剖を行つたというのであるから、 實際に夫れであるか確かでない。 と名前 と思われるものが描かれ、 政二年)も注意を要する。その第六十六圖に恐らく乳糜管 の附せられたものは不自然な形をして居り、 は可能性が多くない。 小森等の文化九年より前に見たかも知れ 説明されている。 この著者は文政 しかし乳糜槽 或は前 二年 ーまで

者、 乳糜管は玄良の子、 各人が受持つた身體部位 あつた。主解六人、助刀五人の名前がこの本に明記 で之に参加した。 玄良も藤林普山もその場にあり、 京都の西刑場に於いて二十三歳の男の刑屍 文政四年(一八二一)十二月十六日、同門の藤田長禎と共に を今日に残しているのが池田冬蔵(復堂)の「解臓圖賦 永二年版である。冬藏は小森玄良(桃場)の門人であ 文化九年の後であるが、 僕役を合せて總勢百二十餘人という盛大な解剖 同門五十人、他門四十九人、 小林義真の擔當である。 も掲げられ 奇縷管を實際にみたことの 伊藤圭介も十九歳の 7 いる。 を解いた。 胃、 その 大小 され、 他に 行事で 若 師 確 畫

改版ないし増刷の機會があったらしく、 解臟圖賦」はこの時の解剖の結果を述べたものであるが、 いま手許に文政五年三月 度々

方言 す二圖は嘉永二年刻のものと同じであるが・欄外のこの書き入れ なければならない。今までの所、江戸時代を通じて唯一の確證で 文)』と附記されていて、これこそ胸管實視の確固たる證明といわ 説に泥して以誤り爲すことを。 す。信に然りと爲す。故に存して改めず。或いは懼る、後の人舊 二を爲す也。余大いに之を疑ひ因つでその執刀者に就いて之を正 て別に一枝を分つ者あり。 糜管の圖に就いて之を觀るに或いは將に脈を相接するの下邊に 於 る。 なない。 を爲す也と云う。然れども此圖はその注入する所は則ち分れて そしてこの嘉永二年本の第二十四枚裏の欄外に『クルムス乳 文政五年と同六年刻のものには第二十四枚裏の乳糜管を示 文政六年九月刻のもの、嘉永二年正月刻のものがあ 然れどもその注入する所は則ち合して 之が爲めに辨ずる此の如し (原漢

誰れがこの附記を書いたのであろうか。功績者である小森義眞(桃郭)は文政七年に五十二歳の若さで死に、著者である池田冬歳は天保七年に五十二歳の程さで死に、著者である池田冬歳は天保七年に五十二歳の関と扉に記され、貽安は舊刻のものとちがつて小森玄良の関と扉に記され、貽安とが充分に推測できる。そうすれば玄良がクルムス解剖書との相違に着目して之を自分の息子である義眞に質問したとの相違に着目して之を自分の息子である義眞に質問したとの相違に着目して之を自分の息子である義眞に近か

でに在世していない。
でに在世していない。
でに在世していないが已れの所見を正しいとして父玄良に答
でに在世していないが已れの所見を正しいとして父玄良に答
でに在世していない。

なお乳糜管實視の問題では麻田剛立が大阪から豊後の三浦梅園なお乳糜管實視の問題では麻田剛立が大阪から豊後の三浦梅園がである。正月から三月朔まで一と月あまりにすぎない。もし閏年である。正月から三月朔まで一と月あまりにすぎない。もし閏年である。正月から三月朔まで一と月あまりにすぎない。もし閏年であつたとしても二た月あまりである。「約岡」以外の特別のルーであつたとしても二た月あまりである。「約岡」以外の特別のルーであつたとしても二た月あまりである。「約岡」以外の特別のルーであつたとしても二た月あまりである。「約岡」以外の特別のルーであつたとしても二た月あまりである。「約岡」以外の特別のルーであったとしても二た月あまりである。「約岡」以外の特別のルーであったとしても二た月あまりである。「約岡」以外の特別のルーであったとしても二た月あまりである。「約岡」以外の特別のルーであったとしても二には麻田剛立が大阪から豊後の三浦梅園がでるまではその神速さに驚嘆するより他ない。

終りに奇縷管或は乳糜管という名前が現在の胸管に改めれているのが今までの所、余がこの字に遭つた最初であを之四に胸管とあり、その右下にやゝ小さく乳糜管と記さを之四に胸管とあり、その右下にやゝ小さく乳糜管と記さ

に必要のことであると考えたので、 き止めておいて、 **彙殊に色々の名詞については、そのまゝに残されているの** れたが、 蘭學事始は緒方富雄博士によつて、 これを究明するのが、 杉田先生時代の通俗語であつたろうと思われる語 諸書を涉獵する中に、 この書の眞意を一層明かにする 豫め斯ような語彙を書 一通り現代語に譯さ それにあたるもの

は 極め(中略)このように奇を好む性質であつたから、 なつていた。良澤を教育するにもやはり隨分變つていた(中 に杉田先生が前野良澤について『この全澤は博學の人であ を發見すると拔粹した。この一節截もその一つである。殊 の門に入つて、 つたが、 良澤という人も生れつき奇人で もう世にすたれていた一節截を稽古して、その祕曲を なかなかの奇人で、好むところ萬事常の人とは異 和蘭の文字と、すこしは和蘭の言葉も習つ (中略) 遊藝の方面で 青木氏

> Ш 崎

佐

だてともなろうかと考えるのである。 たのである』(緒方譯本による)と説明しているので、この で、 て、これがまた和蘭好みにまでなつたように書いているの の祕曲を極める』ことが、當時に於ては然樣に好奇であつ 一節截とは、 これを究明することが、 どんなものであつて、これを『稽古して、そ 前野先生の人となりを窺う手

書文庫六所載 しく考證しているので、その全文を摘錄する。 節截については「南畝莠言」卷之下、二十三に最もくわ

『(二十三) 文祿慶長の頃盛に行はれし一節切尺八といふものあ り、今はふくものまれなり、按ずるに、

羅山文集 卷十九(元和九年作)

唐太宗貞觀年中有起居郎呂才者、 百二十人被執甲執戟而習之。以寓偏伍魚麗之兵法又造尺八八十 善知音律依破陣樂舞圖教樂工

者。並避世之徒也。俱吹尺八(下略) 一枚而献之、太宗大嘉焉。於是景雲見河水淸、協律郞張、文牧出景雲河淸歌。 名曰讌樂奏之管絃。 爲諸樂之首。 其樂器若干出景雲河淸歌。 名曰讌樂奏之管絃。 爲諸樂之首。 其樂器若干

○同書余晉尺八之記云。我邦尺八形。制者擇奇生之竹。挑截本末規模短間一節。上短下長。總胴其中。虚如解谷而無底。四孔在有大森宗字者善吹尺八。嘗手自截一管。聲調適意。號曰余晉。 若干管然未有及余晉者。故祕之年久矣。堀丹州太守爲政講武之 暇吹尺八。宗空於是取余晉以呈焉(下略)

○ 按するに一路老人の名は、僧横川が京華集四卷にみえたり。

○条竹初心集に云。一先一節切尺八は、其濫觸まち~~にてさだかならず、そのかみ異人ありて宗佐老人に傳へたるよし代々い

事を吹出し、其外れんぼながし、京れんぼ、さむなり、井川、 行者ときこえたり。近き頃不人といふ虚無僧有て、ごろといふ るよしいへども了簡せず、昔よりぼろんの家に用るものと聞 とぞ、濫觸はたしかに不知、そのかみ由良の法燈、此道の祖た みなり。虚無僧尺八といふは、長尺八寸にきるゆえ尺八といふ 外、余力有て音をしらべんと思ふ人の一助となさんとおもふの わづかに其かたばかりをうつして、今書にしるし宗君門弟の 末をくむ、我等まで遺風をしたふといへども、夢にだもみず、 こととし、尺八の妙音を味へ、此道中興開山となれり、流水の ひたすら隱遁の身となり、霞をあはれみ、露をかなしむ觀念を 信長公につかへて人に名を知らる。信長公逝去し給ひしより、 此宗君は昔豫州の大森彦七が末孫、勇士武略の後胤なり。織田 宗君に傳へてより、世にひろまり、文祿慶長の比には尤盛也。 三井寺の日光院に傳へ、日光院は安田城長に傳へ、城長は大森 たる者とは聞えず、されども我道にあらざれば其深事をしらず よし田など云さまんへの手有て、いづれも呂律の調子にあはせ えたり。梵字漢土色おしくす梵土などいいしもの、此尺八の執 14

○(寛文九年板本文字模寫の挿繪あるも略)

也。但竹のふとほそによりて調子違ふものなれば、極て寸は定るゆえ此名を付といふ。節より下は七寸、上は三寸八分にきる一、一節尺八、切やうの事、節を一つこめ、長さ一尺八分にき

まらず、筒音を黄鐘の調子に合せたるものなり(下略)中村宗

此書二枚あり、寛文四年甲辰卯月吉日、秋田五郎兵衞板と、寛 文十二年壬子林鐘日山形屋吉兵衞板とあり

洞簫曲(下卷)に云

之者也 子同宮內少輔、 仰當流尺八者、宗左老翁、相傳高顯備前守備前守傳實相房並尼 以、愚以傳惠海是相傳村田宗清仍一流之藤者、無滯覺習畢、爲 毛所誤、不可有之、予雖爲祕書、一向之所望依難默、止贈書 實相房傳教院教院傳大森宗勳大居士宗勳傳愚

時干明曆三四月壬寅嚴島暫居時所挾家注記 大阪 村田宗清

糸竹大全 卷四 紙鳶に云、

など云あまたの吹手蜂起せり 實相房は教院に傳へ、教宗は安田城長に傳へ、城長は大森宗勳 につたへ、宗勳より中興して今の世に是齋宜竹洞中節指田 一音

元禄十二巳卯曆 永田調兵衞 板行、

和漢三才圖會に云ふ、(圖省略

之語與三絃相比 與尺八同類異音遊與之具、其音嫋々、不絕如縷、以爲記歌 一簡切似尺八而短、其長一尺八分、止一節故名之、近世之

宇都宮由的の日本人物史に云、

宗勳者、其先出自彥七、幼好音樂頗以尺八鳴世、曲節無施而不 乎、後陽成帝有詔、使宗勳製五調之尺八此名譽彌高矣、至今言 尺八者以宗勳爲法 可世。一日宗勳登樓奏曲、 時有鳴鶯來和之豈不同聲相應之謂

○黒川道祐の雍州府志卷七、土屋門下に云、 笛尺八

尺八者、多出自宗勳者也、尺八之發好音多、有稱號是謂名管 庵宗勳者於尺八也、世稱美之、其次曰宗君、今西實流絕。凡弄 之、近世吹之、有兩流所謂宗左流、西實流是也、宗左弟子有理 有數流、所謂牛尾流、一草流、 所々造之、其內宜竹所作爲妙、近世指田某、所造亦佳也、吹笛 今按、洞簫其製、與尺八具、考之中華所謂短笛是也倭俗專弄 守田流是也。尺八倭俗稱洞簫

0 村獺拷亭の藝苑日渉卷四、 體源鈔を引て、 尺八の條に、委く一節切の事を辯

幼時猶有善此管者今之尺笛八盛行、而壹越切遂廢云々、 長者爲平調切長曲尺一尺四寸。近世所傳唯壹越切之一管耳。余 平調切、日新黃鐘切、切者國語云調律截管也、蓋管之長短依律 尺八之制凡六、日黃鐘切、日盤涉切、日壹越切、日双調切、日 損益最短者爲壹越切(俗讀云非都越祗黎) 長曲尺一尺一寸。最

天明の頃深川にすめる調理家望汰欄のあるじ、祝阿彌一節切を

15

學びて吹きしが、名管の世にすくなきをうれて、**今**の世に一節

蓋置にきられて失へりといへり。惜しむべきの甚しきにあらず 切を吹くものすくなくなりし故、故人の銘ある管多くは茶人の

市橋家の臣山崎正峰の所藏、 三百年來の者なるべし 一節切十九枚

同 紹窓作

無銘、

樺卷、

同

四百年來の者なるべし

黄鐘調

鶴舞銘黑塗樺卷同 樺卷同 法橋宜竹作 宜竹作

島鐘調 是齋作

樺卷 神仙調 法橋宜竹作 作不知

七名銘 同 黃鐘調

同

纜鐘調

山里銘 黑塗樺卷 鸞鐘調

なくさめがたき秋の山里 吹きおろすあらしならではとふ人も

初郭公銘 黑塗樺卷 黄鐘調

我も人も卯花垣のへだてなく

無銘 きくぞ嬉しき初ほととぎす 無蒔繪

> 浦風銘 樺卷 黄鐘調

妃聲銘 同

無銘 此君銘 同 同

雲山銘 同

寢覺銘 黑塗樺卷 同

なら柴銘 同

尺八 笛箱

同 黑塗 秋草蒔繪 鶴頭蒔繪 東山の末頃のもの験 東山の頃の者なるべし

同 絡石 銘書、裏書、蒔繪

今の世に勝れる名管は、委く山崎氏に藏む、數十年の精力を盡 ることを得たり、又永禄年中の古文書、洞簫曲に載る所と同じ して是を得たりといふ。文化十三年丙子十一月二日夕に一見す 江州中野蒲生氏城跡古木定家かつらもて是を造る

0 尺八十二調子之次第

斷金

0

である。 次に太田南畝の「一話一言」卷二に『一節切』と題し とて十三種の書籍をあげて、その説くところ極めて詳細 たり」。 云々、又一節切尺八は洞簫にあらざること悉く藝苑日渉にみえ 上無 也、中の宗クンは多能なり、末の宗クンはさもあらざりけりと るべし。山崎氏云。宗薫名三代に及べり、初の宗クンは名人 る尺八譜引書に宗薫とあり、いづれも代々ソウクンと號せしな あり、寛文の糸竹初心集に宗君とあり、享保の頃ある人の記せ の尺八手數目といふものに宗勳とあり、明曆の洞簫曲に宗勳と 按ずるに、大森宗勳の名、天和の羅山文集に宗空とあり、寛永 神仙 双調 八あり(一尺四寸五分と有り)尺度の考となるべきものなり又法 盤涉 營織 永祿九年閏八月 へ大に行れしものなり、 日 淸 珍 今物圖の内に古代の尺

は名人 とて、この頃には既にすたれていたことがわかる。 喜多村信節の「嬉笑遊覽」卷之六に『一節截』として『一節行りと 喜多村信節の「嬉笑遊覽」卷之六に『一節截』として『一節行りと 高ので、これを摘録するのは、徒らに紙面を費すのみであるので、これを摘録するのは、徒らに紙面を費すのみであるので、これを摘録するのは、徒らに紙面を費すのみであるので、これを摘録するのは、徒らに紙面を費すのみであるので、これを摘録するのは、徒らに紙面を費すのみであるので、これを摘録するのは、徒らに紙面を費すのみであるので、これを摘録するのは、徒らに紙面を費すのみであるので、これを摘録するのは、徒らに紙面を費すのみであるので、これを摘録するのは、徒らに紙面を費すのみであるので、これを摘録するのは、徒らに紙面を費すのみであるので、これを摘録するのは、だらに紙面を費すのみであるので、

___(17)__

て弟子一人をえらみて傳ふとなん、祝阿彌かたる』

歌八十曲ほどあり、その書を破傘といふ、奥祕の傳は末期に及

に根屋亮尹といへる人あり、よくこの曲をつたへたり。その唱何川町町邊に東條伊織といへる人これをしれりといふ。今神田寺の内原田是齋寺たへてその曲をつたふる物なし、近頃まで小のなりさまざまの手あり委は洞簫記に見えたり當時吹手は相國

傳は日本人物志に出たり尺八を吹しものはみな吹事なるべし、

·一節切の譜あり貞享元祿までもてはやりて琴三絃の合せもの節切の抄簫洞曲に書目ありいかのぼり其外糸竹初心集などに

備前守三井寺日音院近江の安田の城長大森宗勳といへり宗勳が

隆寺に洞簫あり同物なるべしともいへり一節切傳來は宗佐高瀬

\$

に多く用ひしなり人倫訓蒙圖彙に一よ切は尺八より作り出すも

醫史學會例會

くである。 來た。今までの例會の演題と演者は次の如 例會を始め、幸いに六囘を重ねることが出 年七月理事長更任以來、九月より毎月

二、「無寃錄述」の出版年代について 、「蘭學事始」について 九月二十六日 內 Щ

孝

Щ

佐

=

十月十 七日 (前野蘭化先生百五 + - 回忌記

、前野蘭化先生のことども

國實「黃帝內經太素」「明堂」解說 大鳥蘭三郎 (原本

鑑賞。 學館に於いて 國立東京博物館構內、 開催、 重要文化財醫書等數點 馬島明眼院遺 石 原 構應

南蠻寺醫療の誤謬

正倉院御物漢薬について 清水藤太郎

+ 二月 十二日

, 前野蘭化先生と富士川 游先生

二 第1回世界醫學教育會議に於けるフル 1 ン教授の醫育史の講演 緒方 赤松 金芳 富雄

月二十三日

-佛教の律に於ける醫學に ついて

中國に於ける膏薬の起原 杉田 敬節 暉道

二月二十日

喜多村拷窓について(その一、小傳)

安西

安周

二、本間棗軒自筆麻沸湯活法傳書その他 (原本供覽

道明

Щ

崎

佐

明治前日本醫學史刊行の計劃

る。 更し、 限定出版で部數僅少であるが、 史及び疾病觀(藤井尙久)である。學士院の から期待されている。第一卷は基礎醫學を 最大にして最高の文獻となるので、各方面 頁に及ぶ大册で、完成の曉は日本醫學史 争のため長らく中絶 會會員のために一般領布するとのことであ 本年中に出版される筈であるが總計千數 れている。 になり、 今年刊行をみるに至つた。當初の豫定を變 各分科史の權威者に執筆を依賴し 主としその内容と執筆者は、序説 た一明治前日本科學史」のうちの 一·石原明)、病理學史(緒方富雄) 疾病 本學士院に於いて昭和十五年に計 解剖學史(小川鼎三)、 醫學史だけ單行にし三卷とすること 第一卷の原稿はすでに印刷に附 續いて第二卷は夏頃、 していたが、 生理學史(內山 少數を本學 醫學部門は 第三 5 たま」戦 (稻田 よいよ 一卷は 畫し 百 3

+ 一月十 四日

堺縣醫學校と校長森鼻宗次

中

野

操

校兼病院を設け、 いた。翌八年二月文部省の許可を得て材木町東三丁に醫學 東妙國寺に假醫學校を興し、 にもとずいて、 病院として病院が主體となり、院中に醫學教授局をおいた 殊に山中氏は『堺醫學校の教員がどんな人々であつたか、 編者も山中氏も共に、 16 とある。昨年山中貞義氏は、岸和田市の舊家、 には不明である』と筆を投げているのである。 研究會の機關誌「流木」に發表せられた。しかし堺市史の 堺市史」によると、 『堺醫學校に就て』という一文を草し和泉文 九年九月には從來のものを廢し公立堺縣 堺縣では、 校長以下醫學校關係者の氏名を逸し 一月のちに校内に診察所を置 明治七年五月堺市材木町 原家の文書

長は、 事蹟を調べてきたので、宗次を中心として、堺縣醫學校、 私は、 當時關西隨一の啓蒙醫學者であつた森鼻宗次だつた 明治初年出版醫書に就て調査中、 に興味をおぼえて、 努めて宗次に關する 堺縣醫學校の校

三田の川本塾は明治三年二月には閉鎖した。それは、こ

門は、 崎に遊びハラタマ(?)に師事したといわれている。宗次は 純三郎』と出ている人で、後年一門の反對をおしきつて長 た。祖父永有は、九鬼氏三萬六千石の三田藩の典醫、 明治初年における堺の醫學についてのべたいと思う。 恐らくはこれが宗次その人であろうか。 ける門人帳の第五人目に「盛華縫殿助」というのがあるが、 本父子について蘭學と英學を修めた。川本幸民の三田にお に金心寺に學塾を開いたことを聞き、 府瓦解のため、明治元年郷里三田に歸り、 緒方郁藏の獨笑軒塾に入つて蘭學と蘭方醫術を學んでいた この進歩的な父の子として、少壯笈を負うて大阪に出で、 森鼻宗次は、嘉永元年八月、 江戸の開成所(前の洋書調所)の教授川本幸民が徳川幕 緒方洪庵の適塾門人帳の第十人目に『森鼻永有男 攝津國有馬郡藍本に生まれ たゞちに歸郷し、 嫡子清二郎と共 III

る。 を関いる。 の年川本清二郎が大學少博士に任ぜられて東京に移り、幸の年川本清二郎が大學少博士に任ぜられて東京に移り、幸の年川本清二郎が大學少博士に任ぜられて東京に移り、幸

を成すに至つたのである。 立大阪病院附屬の醫學教授局の名稱で復活という敷奇な運 十月には學制改革のために廢校となり、六年二月改めて府 5 設されたものである。三年二月には大阪府の所轄 命をたどり、 の嫡子惟準を院長として發足した浪華假病院にまもなく附 の管轄に移し、 明治二年二月和蘭の軍醫ボードインを教師とし、 大阪醫學校というのは、 翌年八月學制發布によつて第四大學區醫學校と改 それ以後は漸次隆昌發展してついに今日の大 四年七月文部省が設けられてその直轄とな 今の大阪大學醫學部の前 緒方洪庵 から大學 身で、 稱

は病院掛を申付けられている。 る。 5 てからは薬局長副となり、 月に宗次は授讀生試補という職名で月給三兩をもらつてい 明治三年夏六月には、 次で授講生となり副當直醫となり、 エルメレンスがその後任として教えていたが、その八 教師ボ 六年二月再建の府立大阪病院で 1 1 1 文部省直轄 > は任期 滿ちて去 に移

書を列撃してみれば、書を列撃してみれば、

獨徠氏外科新說	新藥摘要	皮下注射要略	內科新選	哥路氏外科新論	藥物新論	日用藥劑分量考	華氏日用新方	藥劑新書
同	同	同	同	同	同	同	同	出廊
年十月	年八月	年七月	年七月	年六月	年二月	六年一月	年十月	願五年十月
								1

あり、殊に「檢脈新法」や「內科全書」は、醫書出版を以て當見)、越里斯藥方全書(未見)、外科診斷學(十五年) などが見)、成里斯藥方全書(未見)、外科診斷學(十五年) などがの九點がある。 その後彼の譯出したものに、 檢脈新法

實は、 時隨一とせられた東京の島村英蘭堂から發免されている事 高 い評判をかち得ていたことを物語るものであろう。 宗次が醫書翻譯紹介者として既に東都に於てもかな

次の布達を管内に頒布して生徒を募集した。 さて堺縣では醫學校を設けることになり、 明治七年四月

りの 管內 シテ ケ學術策備ノ教員ヲ聘シ大二生徒ヲ教化セシメントス。 = 能 = 反クハ蒙味不仁ノ極ナリ、 ョリ竟ニ己レヲ利セントスルノミナラス人民保護 ハス、今ヤ文明ノ聖運ニ方リナカラ學術精覈ナラサル カヲ其職分ニ盡シ聖旨ニ悖ラサル様深ク注意可致ナ ノ醫生々徒ハ勿論從來開業スル ハ至重 ラ職 = 2 テ學術兼備 因テ今般縣下ニ醫學校ヲ設 スル 七 ニ非レ ノト雖 バ 4七速二 其 任 入門 ノ實 勝 ル

7 事。 ラス 業醫ハ變則ヲ以テ專ラ日用治療上ニ就テ有益 但 シテ猥リニ病者ニ薬劑ヲ投スル等ノ事ハ堅ク禁止 故ヲ以テ入門ニ洩ルル者ハ醫籍ヲ除クベク醫籍 シ留學通學適宜タルベク、新入生徒ハ正則 ノ訓 ラ践 ヲ立 ミ開 = 入 1

治 七年 儿

かくして五月十七日に、妙國寺に設けられた假醫學校の

堺縣醫學校

歴書によると この新設の醫學校に校長として招かれたのである。彼の履 開校式が盛大に催された。 つていた森鼻宗次は『學術兼備ノ教員』に該當したわけで、 醫書翻譯を以てすでに有名にな

九等官相當給下賜候事

七年二月十三日

假醫學校講長兼診長申付候事

堺 縣

歳であつた。 は辭令交付と共に上記の職名で醫學校開設 たことを示すものではなかろうか。宗次、 とあって、 日附は實際の開校より三カ月も早いが、 時に壯齢 の準備にあた 一十七 これ 0

なく毎週一定の日にのみ登校授業をうけたこと等に特色が 學校の規定に就てみると、 れのみの學修を認めたこと、 のかというに、明治五年八月學則改正前まで有つた東京醫 せんと企てたのである。變則とは具體的に言えばどんなも よつて司命の天職を恥かしめないような立派な醫師を養成 對し從來の開業醫は變則生として特別教育を施し、これに ち、一般醫生々徒は正則生として醫學全般を教授し、 さて、前記布達に見たように、授業に正則と變則とを分 大體、 (二)從つて毎日登校する必要 (一)専門科目を定めてそ

新政 醫學校に入門 かもそのためには最も强い決意を示し、從來開業醫にして 小僧式の低級 ものは調劑投藥することを禁止するとうたつているのは注 でも恐らく東京醫學校に似た行き方をしたのであろう。し 從來開業の醫師 府の醫師對策の主 無學な醫師 しないものは醫籍を除名し、 を變則生に入れて再教育を施し、 眼 がおかれていたので、 0 素質學識を高めるといった點 醫籍を除かれた 堺縣醫學校 門前 0

に次の布令を廻した。 前 記 の布達が出たので、 管内區長詰所ではそれぞれ管下 目に

值

する。

候間 ノ者 致居 右 右名前至急〇來ル五日迄差出相成度及御通 候人ト ラ通 一人二付入校 醫學 七 取建候達相 入校致度者 金 圓 成候就 1 都而 月二 入 名前書可差出、 テハ醫師 費 金 圓宛可必 ハ勿論調合藥等 差出 知候 尤右名前 也

候向 别 段 ノ事 間鄉

篤

1

御 達可

被成候

尤先般中取

調賣藥書差出

切不相

成候

但

本文入校不致者ハ御達ノ通調合藥等一

ITU 月 +

> 副 長 話 所

ところが醫師の調劑投藥權禁止という最後の切札を以て

0

月七日附で重ねて次の布達が出 入校を勸めても志 てい

願者が思いの

ほ

か少な

か

0

た

ため

Fi.

通 テ 假 ヲ以來ル 兼而達置候醫學校之義當分之處堺材木 = 相 設ケ本月十七日開校致候條入門之儀別紙雛形之 十日ヨリ + 七日迄ノ中 = 無遺漏 町 坝 東妙國 可 願出 縣 候事 三於

七 年五月· 入門願 七 日 (樣式雛形省

入門 料

從來開 業 イノ醫 金 一圓

生徒

金五十錢

每月受業料

開業醫生ハ

金五 十錢

金一十 五

生徒

右之通御達相成候間於町 右ノ通被定候條此旨爲心得相達 々職業之人江右日限入 候

樣 通達有之度 候 也

五月七

副 長

豫定 半額と決定したことが知られる。 以 上 T あ の資料によって、 5 た 0 かが、 開業醫 入學料及び受業料 圓 と五十 錢となり、 が最初 生徒はそ 各 圓

(22)

なお前記布達と前後して、もう一件の通達が堺縣廳から

出

察ヲ乞ヒ病體ニ因テハ往察モ指許候、此旨管内無洩布達勿論新ニ醫術相營度者ハ速ニ入校可致且病者ハ隨意ニ診此度堺市中ニ於テ醫學校設立致候、從前開業ノ醫生ハ

七年五月

堺 縣 廳

それによつて妙國寺の假醫學校では、最初から患者の診察も行い、病狀によつては往診の求めにも應じたことが知られる。入院できたかどうかはわからないが、恐らく病室の設備は無かつたのであろう。そして翌年二月に材木町東の設備は無かつたのであろう。そして翌年二月に材木町東の設備は無かつたのであろう。そして翌年二月に材木町東の設備は無かつたのであろう。

事會同社という醫學研究機關を興し、每月學術講演會を催いたので、彼は來阪後まもなく同志によびかけて醫及として、次でまた大阪軍事病院長として、明治二年から四年まで在阪していたし、大阪醫界には先考洪庵に師事した門人たちもなお多數健在していた關係から友人知己も少たかつたので、彼は來阪後まもなく同志によびかけて醫を付入たちもなお多數健在していた關係から友人知己も少くなかつたので、彼は來阪後まもなく同志によびかけて醫學校

旬刊で發行した。

森鼻宗次は、さきに大阪醫學校で惟準に親炙していたので、當初から醫事會同社に加盟して社員となり毎月の講演で、當初から醫事會同社に加盟して社員となり毎月の講演で、當初から醫事會同社に加盟して社員となり毎月の講演で、當初から醫事會同社に加盟して社員となり毎月の講演で、當初から醫事會同社に加盟して社員となり毎月の講演を發表した「鳴息ノ療法」「小兒下痢論」「小兒肺炎論」「阿弗列・葛里氏描脈器用法論」「篤謨宋氏獨發瘙痒論」などがあり、自螺氏描脈器用法論」「篤謨宋氏獨發瘙痒論」などがあり、自場が開発の報告として、「陰莖內皮癌ノ治驗」「急性心嚢炎家治驗例の報告として、「陰莖內皮癌ノ治驗」「急性心嚢炎療法」「治験」「釣輪ヲ外科的縫合糸トシ用ユルノ利益」などがあり、自場が表別の報告として、「陰莖內皮癌ノ治験」「急性心嚢炎療法」の報告として、「陰莖內皮癌ノ治験」「急性心嚢炎病・動物の報告として、「陰莖內皮癌ノ治験」「急性心嚢炎療法」の報告として、「陰莖內皮癌ノ治験」「急性心嚢炎療法」の報告として、「陰莖內皮癌ノ治験」「急性心嚢炎療法」の表別の報告として、「陰莖內皮癌ノ治験」「急性心嚢炎療法」の表別の報告として、「陰莖內皮癌ノ治験」「急性心嚢炎

席して非常な盛會だつた。まず議事日程に入り選擧によつ 係 長たる宗次の發案斡旋によつたものであろう。 醫學知識の啓發を計ることになった、 醫事衛生上のことを協議していたのであるが、 0 第一囘の衞生會議が縣病院で催されたが、 月からは廣く一般開業醫も出席して、 堺縣では、從來管內の醫務取締のみ縣病院に會 管下の醫務取 心締全員、 開業醫有志、 言うまでもなく病院 討論、 病院生徒ら多數出 當日は縣衞 二月下旬そ 演説などし 明治十二年 同 生

解剖實習を供覽して會を閉じた。

「会長森鼻宗次、副會長新宮凉齋ときまり、次で演説にて、會長森鼻宗次、副會長新宮凉齋、松田孟ら病院の移り、彼は「外熱ノ昇降ハ體內諸器ノ官能ヲ變換スル説」と

三年七月堺縣醫學校四等教授のまゝ病歿 が出版 英蘭堂から三浦省軒、長谷川順治郎共譯の「普來氏組織學」 する先驅的役割りを果たしたものとして忘れることができ 第 したことである。 外新説や治験例を刀圭雜誌に發表した。 だつたことがしられている。堺縣病院に奉職中しばし 年夏、大阪上本町大福寺に在つた當時の浪華假病院の生徒 解剖組織論」(森鼻宗次校閱)が出たわけで、 一は明治十二年「解剖組織論」全三冊圖式一冊を翻譯出版 新宮凉齋というのは、 のである。惜しいかな、 され、 次で一月遅 組織學の專書としては、この年四月東京 丹後由良の新宮家の人で、明治二 れて大阪の松村文海堂から彼の 天この人に壽を惠まず明治 した。 しかし彼の功績の 共に斯學に對 ば海 +

圓、百圓であつた。それから一等診察と一等教授があり、二等醫、三等醫を分ち、月給はそれぞれ二百圓、百五十當時の堺縣病院の醫員俸給表を見ると、醫員に一等醫、當時の堺縣病院の醫員俸給表を見ると、醫員に一等醫、

最下級は十等診察並に十等教授まであつた。月給は一等が八十圓、それから段階的に遞減し、十等に至つては十二圓であつた。宗次の月給は九年四月堺縣病院長申付けられたとき七十圓、十年一月には十圓増給して、八十圓となつてとき七十圓、十年四月五日附で、『一等診察兼一等教授申付候事、病院長從前之通』という辭令を受けている。

太郎、 で、胸腹内臓の解檢だけに四時間有餘を費している。 床所見と解剖所見とを對比解説しながら解剖刀を進めたの この日病院の生徒並に開業醫十名に参觀を許し、宗次は臨 宗次は監獄に出張して執刀し、新宮凉齋、 服役中の十四歳の一少年囚が水腫病のため病死 が、森鼻宗次執刀の下に行われた。というのは、 郎と富秋周達とが助手となつて解剖を行つたのである。 さてこの年、即ち明治十二年の秋、 波多英二ら病院の醫員たち、 それに監獄醫の船木理 堺で初ての病理解剖 松田 孟 したので、 堺監獄 高宮久

は既に大阪醫學校に轉勤していたが、從前の緣故から特にの別莊に移して患部の解剖をしたのであつた。この時宗次の別莊に移して患部の解剖をしたのであつた。この時宗次の別莊に移して患部の解剖をしたのであつた。この時宗次の別莊に移して患部の解剖をしたのであった。この時宗次の別莊に移して思されていたが、從前の緣故から特に

說し、 子弟門生ら多數の參觀者に對し、 指導し、 招 えたのであつた。 かれて解剖に立會い、執刀者船木理一郎及び富秋周達を 且つ肺癆の病理、 また堺醫事協同社の社員三十餘名、 發生論等を演述して深い感銘を與 兩肺の病像をくわしく示 その他社員

から あ で、 ラズ、爲二宿志ヲ達スル能ハザルコト久シ』と云つたわけ 何 をあげている。 醫學啓發とを目的とし、十三年一月我の町禪通寺で發會貳 りでできた團體で、 あつたにちがいないと思う。 つたのであるから社員 セン人智未が開ケズ、各人解剖ヲ嫌忌スルコト蛇蝎啻ナ 因に堺醫事協同社とは何かといえば、これは宗次の肝煎 結社後二年有餘を經てようやくこの特志解剖にめぐり 『從來本社二於テ病體解剖ヲ冀望セシガ如 町田天梁が社主となり、 一同の喜びは蓋し想像以上のもの 社員の親睦と

たが、 四月十五日附で『醫學校長兼勤申付候事』という辭令が出て る。 前述したように堺縣では醫學校として發足しながら、 病院が主體となり教授局をその附屬として主客轉倒し 十三年には再び醫學校の名を再興したものと見え、 九

こうして堺縣の醫育並に醫事衞生全般の發展のために、

か。 酸校
實現
に
先立
つて
解表
を
たっき
つけ
たもの
では
あるまい **酸問題にからんで、縣當局との間に意志の疎隔をきたし、** 滅する運命にあつたことを思えば、 翌十四年新春を以て堺縣そのものが大阪府に合併され 得べき所にあらず。』と刀圭雜誌の雜報子は記しているが、 『何ぞ深き御趣意のあることなるか 其所以に至つては 知り たことか翌三十日堺縣醫學校廢止の縣令が出たのである。 になり彼は『依願本務並兼務差冤候事』となつたが、どうし に突然堺縣知事にあて、辭表をさし出した。 少なからぬ貢獻をした宗次であつたが、十三年九月十五日 堺縣廢止後の醫學校存 九月二十九日

墓地に在ることを記して筆を擱こう。 年一月二十日七十一歳を以て歿したこと、 で、こゝでは觸れずにおく。たゞ晩年は不遇の内に大正七 になった。しかしそれ以後のことは標題の範圍 御用掛(準判任)という辭令を得て大阪病院に奉職すること くも十月六日附で大阪府立病院屋(月給金八十圓) 塚を去つた森鼻宗次は、 舊知の多い大阪に歸つたが、早 墓は大阪阿倍野 から出るの

> (25)

(一九五三・一二・二〇)

關 西 支 部 近 況

の略目を次に掲げる。 刊できたことである。 けてきた。 は日本醫史學會關西支部と改稱、 十八年暮までに五十四囘の集會をもち、 らたちあがり講演、 及につくしてきた杏林溫林會は終戰後まもなく敗戰の虚脱狀態か 昭和十三年大阪の地に誕生し機關誌「醫譚」を通して醫史學の普 復活後最大の喜びは二十七年十二月機關誌「醫譚」を復 資料展覽、史蹟見學等により活動を開始、 近く第四號を發刊の豫定であるが、既刊分 一層斯學發展のため努力をつづ その間、二十四年一月に

第 號 (二十七年十二月發行)

クスシの語義

緒方洪庵翻譯の物理學書

歴代本草に於ける薬品分類の變易 儒醫宮澤通魏の事蹟に就いて

ジゲリスト教授のこと

Ш 崎

佐

因に復刊「醫譚」は第一號は品切、

藤 石 田 原 吉 王 明

岡 西 爲 人

波 五. 郎

阿

知

坊篤英氏選兵論について

越前の適塾門下生

小石元瑞行狀寸考

獨逸人のみた日本醫學の黎明と其の進展

日本におけるカテーテル導尿法の文献的考察

浦 豐

藤

野

恒

=

郎 彦 操

中

野

羽 布 施 倉 玄 敬 治 尙

第三號

(二十八年十月發行)

故佐伯理一郎先生追悼特集

一宅宗雄、 阿知波五郎、 伊良子光義、 三木榮) (丙山孝一、 吉永萠、

字田川榕庵と舍密開宗未刊本

ケムベルの日本記を讀んで 北里先生を偲びて

職後のドイツ醫史學界の一瞥

安 木 築

龍 六

夫

二一・杏林溫故會あて送金の上申しこまれたい。 册送料とも百圓也でお領けできる。 第 大阪市阿倍野區晴明通二ノ 一號以下は余册があるから (振替口座大阪

(中野)

四四四 七四二番

今津藩の種痘に就いて (二十八年五月發行)

第

號

极 枝 茂

III 赤

村 田

松

金

芳

明 治 初 期の日本の 醫學

第 + = 囘 日 本 醫 學 會 課 題 報 告 要旨

面から明かにしようと試みたのである。 方々に御願いした講演の要旨である。 こ」に集めた十一篇の報告要旨は、 昭和二十六年四月に東京で開かれた第十三囘日本醫學會第一 この時には明治初期醫史料の展示を行い、蘭學時代と現代との醫學のつながりを報告と史料の兩方 分科會で課題として、

史料がなくなるであろうし、今となつてはもはや貴重な文化財である。これをこの機會に一應まとめてみることは、 た使命であるという立場で共同研究が行われたのである。 わが國近代醫學の黎明期である明治初期の醫史料は、今までほとんど顧みられず、いたずらに紙屑同然に扱われていた。 われくの課せられ 今後ますく

「稿ではあるが未發表なのでこの機會に本誌に掲載することになつた。

明治 初期 0) 解剖學

小 .]]] 鼎 三

長谷川泰爾氏の功績である。この年の閏十月二十七日から 十二月の終りまでに刑屍四十九、 ことを政府當局に要請して許可を得た。これは石黑忠恵、 治三年十月二十日附の書類で大學東校より刑屍解剖の 病屍三が解剖の材料とし

> 大槻俊齋が刑屍を種痘所に渡してもらいたいという願を出 の數が八十二に達した。これは幕末の文久元年に種痘所の て大學東校に渡された。 厚く葬られたことが記録に残つている。 みきという三十四歳の女がその最初であつて、 して許されなかつたのとくらべて大きい差である。 また明治二年八年十四日に特志解剖が初めて行われた。 明治四年には大學に送られ これは甚だ た刑 屍

桐原眞節は舊幕時代の醫學所で解剖學を教え、 大學東校で熱心に解屍を行つたのは田口和美であつた。 明治になつ (27)

とはほとんどなかつたらしい。

いり 容が「醫科全書解剖篇 剖所の管理に當つた。 てからは、 る。 明治四年の七月にドイツからミュ 長與專齋が明 その改訂版が明治十 この二人が解剖學の講義をして、 治八年九月の日附でこれに 」として出版された。 後にミュ 年八月にでた。 ル v ルとホ ルレルとホフマンがき 山崎元脩が筆記 フマ 田口は専ら解 題言を書いて 2 の講 義內

ら同二十年にわたつて金原寅作の藏版として出された。 書が更に鈴木規矩治ほか三名の合譯によつて明治十七年か治十三年から十七年にわたつて「海都滿解剖圖」をだしている。 このドイツ

體學語箋」という小冊もすつかり英語でできている。 ことが注目される。 L 覽にいれる。 々木師興の「解剖、 こゝに大學東校の藏書印のあるウイルソンの解剖書をご 當時さか この譯本は明治四、 んに行われた解剖書の翻譯に英語 一九 五九年のフィラデルフィア 動脈篇」 明治四年に大野九十九のつくつた 五年ごろできたと思われる。 一冊はその一 部を譯したものら 版 0 ものが多い である。 一解 佐

> では慶應義塾の松山棟庵、 年)はいずれも米書を譯して大阪で出版されている。東京 剖摘要」(明治九年)、村上典表の「華氏解剖摘要」(明治 谷義春の「解剖新圖」(明治八年)、松村短明、高木玄眞の「解 である。 圖一、 で出された。フレス(J.A. Fles)は當時よく使われた蘭書 村矩明の「解體訓蒙」、 初學人身窮理」をつくり明治六年に出版 また大阪において數多くの醫書出版がおこなわれて、 中欽哉の「布列私解剖圖譜」が明治 その他、 岡澤貞 同じく松村の 森下岩楠がやはり米書を譯して 郎の「解剖必携」 「虞列伊氏解剖訓蒙 した。 五年のころ相 」(明治六年)、 つい 浦 松

田東、 丰 師 が相ついで來朝した。明治七年から明治十三年にい 讀むと當時のことが偲ばれる。 の解剖教場の當直日記なるものがいま残つてい の教師をえた。 きは第一大學區醫學校と稱せられた)は初めて解剖學專門 明治六年の七月にデーニッツがきて、東京大學 萩原、 田口和美であるに相違ない。 玉越興平、 田 П デーニッツの後にギールケ の三氏出勤とあるのは 岳野忠興、 田村克巳の四人である。教 執筆者は明治七年の分は今 デ 1 = およびデ " " る。 (このと 萩原三 それ たる間 イツセ

明治初期の生理學

內山孝

江戸時代中期から末期に發達した蘭學、そのなかの生理學の源流は主としてドイツのそれをオランダ語にしたものゝ和譯であつた。しかしそのなかにあつて伏屋素狄(琴坂、万町權之進ともいつた)の著わした「和蘭醫話」(文化二年刊、一八一五)のうちに盛られた腎機能についての獨創的な實驗的研究は大矢尚齋の「寬政婦人解剖圖」(寛政十二年、一八一〇未刊)とともに實驗を根據として漉說(Filtration theory)を提唱したもので劃期的な研究である。しかしその時代を一般的にいえば翻譯時代であつた。
これにつぐのが明治初期の生理學であり、その特色は、(一)蘭學の生理學の餘流もあつたが、(二)英米の生理學の日理學の餘流もあつたが、(二)英米の生理學の日理學の餘流もあつたが、(二)英米の生理學のとしての生理學的研究が本格的にはじめられたのである。としての生理學的研究が本格的にはじめられたのである。としての生理學的研究が本格的にはじめられたのである。としての生理學的研究が本格的にはじめられたのである。

汲むものである。英米の生理學の譯本は今囘の「明治初期 といったが、いずれも生理學の專門學者ではなかつた。 で生理學を講じたがこれは臨時のことで、明治四年プロシャに依賴したミュルレルが來朝して生理學を講じたのが オランダの源流ドイツの醫學をとり入れたはじめで、明治 加年ベルツが來朝した當初にも一時斯學を講じたことがあ でたが、いずれも生理學の專門學者ではなかつた。

明治九年 Ernst Tiegel が生理學者としてはじめて來朝し、こゝに本格的な生理學の講義並びに實習がはじめられた。『併し器械が殆んど皆無であつたから竹木を以て硝子銅鐵に代え種々の器械を自ら製作された』(大澤謙二博士述本邦に於ける生理學の發達、明治四十五年)とチーゲルの弟子となつた大澤謙二博士は記しておることによつて當時の有樣がわかる。

Funktionen des Rückenmarks der Schlangen. Pflügers

大の初期に生理學を講じておるのは蘭學の生理學の流れを

Archiv, 17, 1878)。 大澤謙二博士は再度の歐洲留學の間にイヌの脊髓傳導路についての研究はわがくにの生理學表しておる(一八八二)。これらの研究はわがくにの生理學表しておる。大澤博士は明治十五年に歸朝しチーゲルのあことである。大澤博士は明治十五年に歸朝しチーゲルのあとにはじめて東大教授として生理學を擔任するようになつとにはじめて東大教授として生理學を擔任するようになつとにはじめて東大教授として生理學を擔任するようになった。

たのであつて現代のわがくにの生理學の父というべき人で、大澤博士によつてひらかれた生理學の研究はしだいに深たのである。

明治初期の病理學

緒 方 富 雄

んど唯一の刊本であつたが(ほかに小關三英の「西醫原病一八四九)が、當時の西洋の病理學をとりあつかつたほと明治前には、緒方洪庵の「病學通論」(三卷)(嘉永二年、

それ自身未完成のものであり、その體系も、原始的なもの略」(天保三年、一八三二刊があるが、小さなものである)、

であつた。

本ないでおそらく石井信義によつて講ぜられたと思われる資料がある。 ある。

フエルトなどが病理學を講じ、その口授譯書ものこつていこのほか、明治直前から直後には、ボードイン、マンス

る。

採用とともに、にわかに體系がとこのい、ドイツ人として 後任のウェルニツヒが講じたが、 内科學の總論の部分に當るものである。 はホフマ 本格的なドイツの病理學が教授せられた。その講本は、今 しかし、 ~ ルツが病理學總論を受持つにいたつて、 ンがはじめてこれを講じた。 明治四年の東京大學の前身におけるドイツ醫學 明治九年十二月 たゞしこれは今日の 以後、 當時の全く ホフマンの (一八七

わたつて病理學を講じた。
さまをうかがうことができる。ベルツはそれから十年間にはまで存していて、後に刊本にもなり、つぶさにそのあり

ッ醫學の飜譯的著書である。 (六卷)(明治十三年、一八九○)の著がある。本格的なドイ(六卷)(明治十三年、一八九○)の著がある。本格的なドイ體剖觀示要」(五卷)(明治十二年、一八七九)、「病理總論」 一方日本人としては三宅秀が、いわゆる通學生(後の別

東京大學における本課生の病理學が日本人によつて講ぜ東京帝國大學醫科大學教授に任ぜられたときにはじまる。東京帝國大學醫科大學教授に任ぜられたときにはじまる。東京大學における本課生の病理學が日本人によつて講ぜ

明治初期の衞生學

中野

操

衆衞生に觸れたものとしては、高野長英、岡研海共譯「蘭明治以前に於て西洋衞生學を說いた成書で、多少とも公

時代がその程度のものを要求していたからだと解釋すべき であろう。 方が、はるかに當時の日本の現狀にマツチしたからであ 俗的な言葉で個人の日常生活を衞生學的に解説することの が見られたにも拘らず、住宅・被服・飲食等日常生活を通 しての個人並に社會全般の衞生的要件には何らの變改もな かつたので、 醫學についてみても醫育・醫術の上で漸次進步改善の よつて政治・外交・社會制度等に大きな變革があり、 生を説いたものは一冊も見出だせない。 數種の衞生に關する書籍が出版されたにも拘らず、悉く個 部弘國共譯「西洋養生論」、神戸文哉著「養生訓蒙」その他 人衞生を取扱つた通俗的乃至啓蒙的のものばかりで公衆衞 初期の約十年間は、 久我俊齋譯「三兵養生論」の四者が見られる。 說養生錄」、 高遠な公衆衛生學を說くことよりも卑近 松本良順著「養生法」、杉田玄端譯「健全學」、 緒方惟準著「衛生新論」、 これは維新革 横瀨文彦、 しかるに明治 あと で通 阿 +

刊行せられ、またチーゲルの講義は大井玄洞譯「衞生汎論」から十五年春にかけて柴田承桂譯「衞生概論」上中下三篇がから十五年春にかけて柴田承桂譯「衞生概論」上中下三篇が東京大學醫學部で生理學擔任のチーゲルが衞生學、特に東京大學醫學部で生理學擔任のチーゲルが衞生學、特に

學が江戸時代の修養的な色彩をおびた個人的養生思想から 代衞生學は明治十二年に初まると言えるのであつて、 公衆衞生學の專書である。そこでわが國における西洋 脱却して、 と題し十三年二月に出版された。 めには、 實に明 社會的公共的の性格をもつたものに飛躍するた 治初期の十 餘年という準備期間が必要だつ この兩者がわが國 最 初 0 近 0

る。

提案した明治六年、 たことを知るのであ 對策が實施されて國民の衞生思想、 司 活躍により、 皷舞啓發されるという結果を生んだ。 海港檢疫船舶檢疫、 コ 薬場の設置、 得るのであつて、 レラの大流行を機とし、「虎列刺病豫防法心得」の布達、 かし衞生行政の方面に於ては、 彼が文部省醫務局長として醫制七十六箇條を 次で十年から十二年にかけて全國を襲うた 牛痘種繼所の新設、 早くも集團衛生學の實践があつたと言 飲料水檢查、 その他多くの豫防醫學的 一代の傑物長與專齋の 公衆衞生觀念は大いに 種痘規則の公布、

實に明治初期の衞生學の特色であったと考えたいのであ 先ず實踐があつて、 によつて余は、 のちに學問の移植があつた――これが 衞生學殊に公衆衞生學に關する限り

明 治 初期 の内科學

藤 井 尚 久

た。 醫學の內科學が官學正統のものとして發足する端緒を拓 したこともあるが明治三八年(一九〇五)まで大學に在 ルツ教師と交替した。 ル が明治八年の東京醫學校からは通學生教場を設けて若干 期の獨乙人教師は所謂本科の大學生に講義したものである を經て今日の東京大學醫學部となったものである。 京帝國大學醫科大學、 校 て、 成の醫學教育を施した。 る。 あるが、 レルと共に内科醫のホフマンが招聘されるに及んで 明治四年(一八七一)大學東校にプロシャから外科醫 我國近代的內科學を興した恩人である。 明治七年にはウエルニヒ教師と交わり、 東京醫學校、 内科の方には桐原眞節、 これ は邦人教師が邦語を以て教育に當るのであ 東京大學醫學部、 このベルツ教師は途中ちょつと歸國 東京帝國大學醫學部といくたの變遷 これは後に別課と云われたもの 樫村清徳氏等があつた。 帝國大學醫科大學、 大學東校は東 同九年にはべ 明治 獨 0 明治 速 初

32)

次邦人教授によつて大學の講座が受持たれるに至つた。 入澤達吉が教授となり、東大に於ける三內科が出來た)、漸入澤達吉が教授となり、東大に於ける三內科が出來た)、漸入澤達吉が教授となり、東大に於ける三內科が出來た)、漸入澤達吉が教授として內十七年には佐々木政吉氏が初めての邦人大學教授として內十七年には佐々木政吉氏が初めての邦人大學教授として內

であ 謙齋、 響を受けた人々も少なくなかつた。 以 醫) 所改 長崎精得館(さきの養成所改め)や江戸の醫學所 後の獨乙醫學系の大學の當事者中にもこの英語醫 1 明 る。 の支配下にあったものと、 め 治 ン氏等の門下にあつた英語醫學派であつた。 佐 初期に於て醫事にたづさわつた人々は所謂蘭學系 々木東洋、 0 出 身者と、 高橋正純、 官軍大病院長ウイリス 岩佐純、 民間の米人醫 卽ち石黑忠恵、 三宅秀等はその へボ (英國公使館 (西洋醫學 明治 2 學の 池 几 = 例 田 影 年 1 0

松 惠會醫科大學の源流)、 醫學校とその 7 はならぬもの 山棟 歸 叉明 つた) 庵等の主唱による) 治 初 の慶應義塾醫學所(明治六年 期 高木兼寛の成醫會 に 0 英語 福澤諭吉 醫學派として其存在 醫學會社、一个の醫師會、 等がある。 (米及び歐洲を維新前 (明治十四 歯科は民間の米人醫 一十三年)と海軍 の記憶されなくて 年成る、 明治八年、 に視察し 今の 慈 k

> なして居る。 に指導される所が多く、現存する私立の歯科大學の源流を

現存する醫學雜誌中最も古いのは「東京醫事新誌」である。現存する醫學雜誌中最も古いのは「東京醫事新誌」である

るに及んで衰退の色を濃くしたものである。かつたが、明治九年西洋六科による醫術開業試驗が施され明治初期に於ては永らく我國に存續した漢方醫の數も多

明治初期の外科學

大鳥蘭三郎

あ 0 に開設された軍事病院である。 夫々手當を受けたが、 地 もまた戰争に關連して始まつている。 長としてさきに鳥羽伏見の戰に官軍 つた英國公使館付醫官のウイリアム に起つた戦亂により生じた負傷兵は各地 戰争は外科の發達と深い關 こゝに重要なの 連に 明治新 あるが、 政 0 は 明 ウ 傷 治維 府はこの 明 イ 兵 治 の野戦病院にて 明 1 0 元 新に 治 治 IJ 年 初 ス 療 軍 際 几 期 を任じ いに功の 事 月 L 0 病院 横濱 て各 外 科

堂邸 始まつ 7 改 に外科學の指導に は 醉 紀聞」 , 建 加 ウ の診療に當つた。 プ より大學を去るまでウイー た 時 3 つて 1 傷兵の治療に當らせた。 稱し、 教育を施し、 里を n に 跡に ク 日本に紹介された。 I 2 ij として 用 本科 ヤ H スマ 職 移され、 1 述べ ウ ス に就い た 0 60 H ル 1 る。 て手 はこうで専ら外科を講じ 陸 水 教師として主として外科 " ル な 出 1 12 軍 ٢ I 横濱軍 現 1) その 夕醫 術 版されている。 驅 た から 同年十 關 から この を行 在の東京大學醫學部の前身をなしたが、 ス 來り、 血 を院長として傷兵のみならず一般病者 して大きく浮び上つてくるのはこゝに 111 消 着 v 法及びギブ 事病院は明治 ウ 毒に 大病院は舊幕府醫學所を附設 0 任 才 1 月に東京府所轄となり、 イーリ 三二二 12 から 水 た。 1) ウ ルド リス ク V お ス 1 ウ 3 H ル ル 3 ス 1 イー 明治二年七月の學制改 1 は外科教師 . は明治四年八月に來り、 n v. ス繃帯 1 0 1) た 111 ル 氏 ル ス 元年 名が日本の醫學教 た。 IJ 亞 防 1 0 を講じ、 0 0 でボ ル ス 鉛 後任 術は 腐法を始め 事 この 九月に東京下谷藤 0 又 V 蹟 後任にはドイツ は 0 三十 ードウイン ル 1 の詳 講義は 過 任 は 診療 0 にあ 來着が マン ウィ ル 大病院と しいこと 7 v 1 日本に ガ b 「日講 携 1 12 育特 革に によ 豫定 か 2 B 醫 大 麻 酸 0 12

> 紹介し、 三十四年六月に至るまで東京大學教師 任には明 約を示せば次の 日本に在ること二十數年に及び、 の發展に最も多く貢獻した。 治十 消毒に盛んに石炭酸を使用 四年に 如くである。 來たユリウ ス・ ス クリバ した。 ス 明治初期 クリバ 0 職 0 シ に在 手 が襲 術に就 ユ 0 12 日 0 ツェ 本の外 た 7 從 明 0 0 治 科 0

學 7

昇 績の低下するのを意としない程であった。 綿 用 を重く見たことで、 1 4 に於ける明治初期の外科學の狀況は凡そかく から たが、こ 新潟等の V. 汞水、 ゼが使われた。 IJ を用い縫 行 ス 昇汞綿が使われ、 われるに至つている。 ター 前者には昇汞ガーゼ、 クロ 各地 れに準 氏 合には絹絲を使い、 の防 1 の醫學校にも夫々西洋の醫師が ル じて大阪、長崎、京都、 特記すべきはスクリバが大いに醫學教 亚 腐法を大いに勵行し、 臨床講義を勵行し、 鉛水を併 後者には石炭酸水ガーゼ、 用した。 沃度ホルムガー 繃帯には乾、 麻醉 熊本、 その 石炭酸を主として 東京大學醫學 1= は 爲 ゼ 濕 招かれ、外科 0 如くです ク には 昇汞水 種 + H 12 を分ち 手 術 水 チ 12 12 成

明治初期の産婦人科學

石 原 明

が内科 二郎 月、 兼任 0 に婦 に於ける産婦・ 產 術を傳えた最初の人である。ついでエルメレンスも大阪で 8 ウ 主に外科手術 産婦人科の門人としては清水郁太郎、 婦人科 イン てわが國に紹介されることゝなつた。 ウ 末 るかにすぐれたものとして世 浦島堅吉、 主任として着任し、 工 が大阪 人科はそれに伴わなかつたが、 以 の本格的 ル 囘診の課 來 IJ ニッヒが代り産婦人科を兼任、 ス 人科學の第 醫學校教師となるに及び、 で 西洋醫學がわが國 100 あ 榊順一 目が設けられ外科のミュ な診療を開始した。 った。 防腐法を應用した。 郎等あり、 一期とする。 産婦人科をも兼任 元來わが國では産科のみが發達 に傳えられ、 間 これらの人は各地に於 から注視されたものは これまでを明 明治四年四月、 明治二年蘭醫ボ 高山尚平、 彼は卵巢嚢 婦人科手術もはじ 更に九年べ ついで七年十 ルレルがこれ した。 從來の 千葉稔 ~ 治 腫 漢方よ ル ル 東大 ド 初 0 ייי ייי を 期 手

> 八部、 出來る。 二十例の卵巢切除術を行い、 期を第一 シ れたが主 助 0 て最新 ユルツェ、 教授となり、 研究論文は歐文十五篇邦文四十二篇を教えることが の産 + 一期とする。 任はやはり外人の兼任であつた。この 四 年にウェ 婦 スクリバも一時産婦人科を兼任した。 科診療を行 はじめて邦人による産婦人科の 十年以降 ル ニツヒ 4: 産婦人科の専書としては約 この頃までの間に東大では約 現代の産婦人科學の基礎を作 に學んだ櫻井郁 頃 講 郎 義が開 が東 この 外科 時 0

えた。 再びべ た。 な時代である。 を得て日本化した、 時代を第三期とする。 リウムを考案、 て獨立した。講義は一 あつたという。 教授となった。 明 明治十八年清水は惜しくも若くして死歿。 治十六年、 ル " が兼任 清水の死 彼はこの年、 こゝにはじめて産婦人科 清水郁太郎がドイツより歸朝し東 のちにこれは し助教授櫻井郁一 わが産婦人科學史にとつて最大の重要 輸入まもない西洋 週二 はこの意味に於て大きな損失を與 一時間、 漆塗製子宮鏡と清水式 п 助 F 郎が之を助 産學は模型演習の 2 の産婦 博覽會に出 は邦人教授によつ けた。 產婦 人科學が人 大の 人科 品され ベッ この 主任 3 サ

る。 術については「醫事新聞」三〇四號に詳しい論説がのつてい となり、 明 これによると着任以來半年間に九例の開腹術を行つた 治 以 + 後外人教師は全く關係がなくなつた。 一年 九月、 濱田玄達 が歸朝し、 東大の、 濱田の手 主任教授

0

とい

50

明 治三年の 譯した杉田玄端の「產科寶凾」(六年刊)が最初であるが、 x を創刊し るが異色あるもので、 明治初期の産婦人科專書のうち、 2 ス 0 著になる淺田宗伯の「産科集成」は漢方醫書ではあ たのをはじめとする。 一年 講義 一月櫻井郁二郎らが「産科婦人科研究會雜誌 日講紀聞、 帝王切開術を詳記してある。雜誌は 産科論」と英國のミッドの書を 六年の刊行に係るエ 明 ル

明 治初期の眼科學

等がある。

鮫 島 近

ある西洋眼 永 三年杉田玄白等によつて飜譯された「解體新書」には眼球 明 治 初期 科が輸 0 日本眼科は未だ搖藍期であつて、その序曲 入された幕末の眼科界を展望するに、 安 で

> "Doctorina de morbis るが、 ーボルド來朝して從來の書籍上の知見を實地に教えて吳れ され又初めて日本語に飜譯された西洋眼科書である。 科新書」と稱して上梓した。即ち本書は初めて日本に輸入 全書」と名ずけ、文化十二年玄白の子の立郷が増補して「眼 川榛齊が寛政十年夏から翌春にかけて飜譯して「泰西眼科 日本へ輸入され、 折衷派とも云うべきものに本庄晋一、 が如し。 た。彼は眼科に長じて居たと傳えらるゝも事 解剖圖が載せてあつたが、 眼科醫は只書籍によつて眼科の智識を得たが文政 土生は寧ろ友人と云える立場にある。 眼科を以て著聞する門人に高良齊、 プ v 2 oculorum"の和蘭語譯本を宇田 クの著したラテン 寛政六年和蘭眼科書が始めて 上田公鼎、 その後、 土生玄磧があ 實は然らざる 語 馬島圓 で書いた 六年シ 漢蘭 如

0

が來朝して眼科 大學東校を上野公園に移轉の議あるや反對意見を建議して に聘せられた。彼は眼科に秀ずることシ ードウインは文久二年長崎精得館に、 く我國眼科に寄興すること頗る大であつた。 明治に入つて四年に獨乙からミューレルとホツフマンと も獨乙流になつた。 是れ 明 ーボ 治二年大阪醫學校 より先き、 ルドの のみならず、 蘭醫 比でな

東京醫 ある。 學校に赴任 移 奈川で開業し一 8 ル あった。 ての シ 轉 を中 1 米醫 對綠 學校 ~ 岸田吟香の精綺水はヘボンの處方と傳えらる。 ル 止 內障 ガ 並 したが白内障手術は墜落法を行つたものゝ様で せしめ ボ 0 に 日數百分 大病院 ンは宜 性 眼 た。 虹 科史でも知られる。 彩切 又文久元年來朝した英醫ウイリ 名の患者を取扱 教醫として安政 で外科の傍ら眼科を擔當した事 除 を行つた。 明 い特に眼 六年來朝したが、 明治元年に日 治 一年暮鹿兒島醫 科に有名 本 で始 は ス To 神 は E

0

ナ

IJ

チ

りか

ない。

教室 これ 須 教 て退職 年に大學に初 7 生梅錦之丞歸朝 から と交代し外科に眼科を兼擔し、 ル 投に任 初めて 來任 田 が外科の傍ら眼科を擔當したが、 我 哲造 を補 主任 國 唯 U して外科を兼 はミ せら となる。 佐 日 ス ク 本人の 0 めて 1 n IJ 大學であ 二十 教室主 1 バ スクリバに代つて眼科を擔當した。 二十二年 代 v 眼 眼科病室を設く。 ル及び つて再 科擔當 ねて眼科を教授した。 任とな 年 つた大學東校 スクリバ 眼 び眼科 シュルツェに師 の教師が出 科專 る。 十六年に至り 叉眼 攻留學生 兼擔辭任後は同氏が を兼擔し、 十八年梅病氣の故 七年十二 では明 一來たの 科の先達 河本 + 事して眼科を學 治四 助 眼科 月シ である。 四 并 重 教授甲 年 年 次郎 專攻 スク 1 11 E 1 達 兹に於 ル 歸朝 を以 留學 也 眼 野 + IJ ייי 1 科 バ

> び相 を 年 講義 擧ぐる事 明 井 上眼 治元年から二十年に亙り我國で發行 前 の筆記で毫もオデリ 後して助教授となったが、 科 病院 出 來るが、 老 須田 殆 は十 んど皆飜 九年 後に野に下り井上 譯書か或は一 須 田 明 の眼科 k 堂 多 日 書は一 創設 講紀聞 上は十五 二十種

明 治 初期 0) 齒 科 醫學

山 H 平 太

期 0 口 8 まで存在していた。 療治と日本特有の入歯を施 科醫)、入歯師、 0 D があつ から 國 には平安時代から口 た。以來その業を執る者に口歯科醫 入歯 渡世者、 腔、 L 歯抜きがあつて、 この 特に歯 系統のも 牙疾患を診 O T 0 支那 中科 から 明 療 傳來 治 する 醫 中

西 歯科 歯 科 醫學 學が渡來した徑路を按すると、 は この系統とは 全然別 な 8 0 で D から 國 に 泰

- 0 外 國 人 歯科醫によつて直接わが國に傳えられたも
- 日本人が外國で歯科醫學を修得し、 歸國 て傳え

を考えることが出來る。

ラック、 大きく、 間 外 ル 1) から である。 外國 人歯科 から 横濱に來たのが最初で、 " 0 フラ 在留で ク等である。 人歯科醫から直接に紹介されたもの 記錄によると、万延元年 醫が日本に來た動機は不詳である。 I リオツト、バーキンス、 あ ス 國人で、 たのは、 これらの外國人歯科醫中、 他はアメ 出張的開業で事足りたもの 次でレ IJ カ國 スノー、 W. C. アレキサ 人である。 イー は、 沙 いづれ アレ 1 ンドル、 その影響は スト これ 丰 步 も短期 ア v ンよう ーーキ ギ 50 1 2 F. 1 1

試驗制 た。 醫 醫 術者も文化の普及と、 彼地で歯科醫學を學び せざるを得なく 術を修 術の 日 かくて日本に歯科醫術が實施されたが、 本人數名の希望者が、この外人歯科醫について、 研修 度 得 0 の必要を感じて更めて修學したのである。 制定によつて、 門生を教育した。 なつた。 歯科醫術の浸潤するに從つて、 歸國後、 經濟の面 開業し傍ら門生に傳授 一方、 からも歯科醫術を施行 日本人が渡米し、 古 來の 前 歯科 歯科 記施

この時期の歯科醫術は全くの模倣で、資材も外國製品を

を得ない。 輸入して使用し、 故に特に取りあ 治療もある範圍に限局してい げて弦に 述 る程 0 たの 事 柄 は は ıĿ. な む

るが、 0 た。 五年) 出版の要が起つた。 傳授された觀があるが、 版 同 固齡草」(十四年)、 歯科全書」前 である。 後編 かような情勢なので、 され が發行されたが、 は二十 この當時は、これも歯科醫の必讀すべきもの 明治十八年八月にアメリカ たのである。 年十 編が出版されて、 月に發行された。 この期間には「歯の養生法」(十二年 「保歯新論」(十四年)、「歯の養生」(十 歯科醫學と云うよりは歯科醫術が 門生を教育する必要から著書 いづれも所謂通俗的な養生書であ 初めて 版 以來各種 0 歯 口 腔外 科醫學書 0 科學を譯 翻 から 譯書が出 であつ 現 籍の L た

(38)

明治初期の薬學

清水藤太郎

め、國産を摘發し、外國産を裁培し、生藥に簡單な加工を明治維新までの我國の藥學は、動植物性生藥の名實を定

石、朱、昇汞、甘汞、明礬の六品に過ぎなかつた。薬は殆どなかつた。所謂製薬ともいうべきものは芒硝、硝するのが主たるもので、多少とも化學變化を起すような製

京都、 0 會社を東京に設立し、 阿片も多少作られた。十六年政府は官民合同の大日本製薬 浦 2 本的には種 甘 年京都舎密局に行幸の際は、アルコール、朱、 造弊局で作つたが、 が藥學活動の 洋藥は不良贋造品が甚だ多く、 までは専門の薬學教育は無かつた。 米視察から歸朝した長與專齋が大學に製薬學校を設立する 學教師として來朝し、 製劑を作つたのみでその後事業不振であつた。二十三年 公英エキ 硝 内國博覽會には硝酸銀、 七 明治四年(一八七一)ドイツ人 Müller, Hoffmann が大 石精、 ニア水、 ス、 々のものが作られた。 硝酸銀等六十五種を天覽に供したというから見 横濱、 ア 最初であつた。 ルコ ゲンチアナエキスが出品され、この頃から ール、甘汞、 多少製薬する者もあり、 長崎に司薬場を設け薬品試験をしたの 十八年から事業を開始したが、ガレヌ 藥學教育の必要を提議し、六年、 **冰醋**、 五年製薬原料たる硫酸を大阪 その試験 昇汞、 十年の內國博覽會には ハツカ油脳、硫酸銅、ヨー 明治前後に輸入された 0 赤降汞、 ため七年東京、 明治天皇が十 エーテル、 白降汞、 歐 ア

> 唯一 ドの F. も輸入であつた。 は明治の終りに至るまで全くふるわず、 十八年の外國のダンビングにも堪えて、 4 の輸出薬品となつたのが異數の進步であつて、その 製造は二十年頃から行われ數年にして盛大に趣き、 硝酸カリ、 ヨードカリ、 粗製石炭酸が出品された。 ヨードホルム、カフェイン、 アル ハツカと共に我國 海草灰 1 クロ リル からョ の如き ホ ル 他

ある。 た。 が醫學から分派したときは醫學者として の他の たオランダ人 Geerts も四十一歳で横濱で死 年アメリカの製薬學校に學び、 ٧ が、一つは明治前後の薬學者が比較的 又二年來朝し我國の藥物を調査し、 り、後日本醫事新誌を創刊した太田雄寧は三十一歳の短 た舎密局長松本銈(松本良順の長男)も二十九歳で去り、 藥學がかくの如く起らなかつ 慶應二年オランダに留學し後ドイツで秀才をうたわれ シーボ 明治初期の薬學の先覺者石黑忠恵、 ルト門下の藥學者高野長英は四十七歳で自盡 歸朝して愛媛の病院長とな た 0 藥品試驗事業を創立し は 短命であつたことで 種々な原 終始するに 緒方惟準は藥學 んでいる。 因がある 至 Ŧī.

薬學教育については十二年太田、柴田、虎岩「七科約説」

と稱し、 教育に 調製法、 た學問をしたような自覺を與えたの な奇觀を呈していた。 解剖學と同 七 に、 から 醫藥教育は解剖、 胚胎しているのであ 卒業生は『製藥士』と稱して、 成り、 用 格に立ち、 法に及び、 その薬物學を見ると薬物の作用の外 後年『薬學士』が何か『薬劑師』と異 生理、化學、藥物、 本來の藥學が藥物科 大學に於ける藥學教育は は既にこの明治初期 薬學と區別するよう 內科、外科、產科 として化 「製藥學」 基 學 原 0 0 0

明治に於ける漢方の沒落

龍野一雄

古典 學 持 して文字の上だけで正しさを主張した。 たぬ經驗 デ たい イオロギー 末 0 整合性 敎 ま」を引 養としてあるに過ぎなくなつてい 主義だつたので、こゝに學と臨 のみ たる儒學によつて支えられ、 5 が論證 いだ明 的 治初期 に行 0 \$ n 漢方醫學は封 考證 臨牀は理 牀とは た 學を方法論 古典を祖 遊 建社 論 體系を 離 述 L 會 2 L 0

然るに明治社會の要求する所は資本主義社會を成熟させ

轉化 勞働 るため 開 聯として翻譯醫學に ことは言う迄もない。 發見と自然像の擴大そして物理 胞病理學及び細菌學を典型とする微視的 學の目標としては人體及び疾病に關する認識を主とし、 科學の方法論としては資本主義社會に伴う實證 とする治療の劃一性による社會醫學の建設を必要とし 11 力の T 方向をとつた。 あ の富國强兵と、 つた。 維持を目的として 富國强 あ それ等の醫學の源泉は文明開化 こゝにより多く客觀性を得 速 0 兵のためには産業及び た。 かに 豫防 世 界 化學的即ち 衞 生及び 水準に追 方法による各種 類的な病名を對象 付 物 質的 軍 1 ため 主義であり 隊に於ける 基礎 んとした 0 文明 0 た。 0 0 細

等 藥品、 1: には漢方の否定が必然的になつた。 ヤ 治 奇なもの 陽五行的自然哲學對近代科 療 ال 々數上げれば際限がな 立たされた神農黄帝、 東洋文化對西洋文明、 3 0 IJ 限界を破 手による診察對道具による診斷、 ズ への憧れ、 ムは ここと る外科的手術、 に對 生藥即ち自然物對大量生 决 陳腐舊弊な傳統的慣 古 學思想、 か 典對 Ų 新し 7 萬能的未分化 H 1 X デ 4. フ 7 アク 醫 力 2 術對 學を形成するため ル チ 1. 不變對 技術、 產的 1 對專門的 習に對す ア以 力 一發展、 16 2 內 學 1 前とキ 3 I. 0 陰 的 業 新 前

るに 將來に 制度 争が行われるようになつた。 その最初 至り、 で 致命的打撃を受けるとして漢方存續運動が展開され 試 驗科 理 0 論 具 八體的 目が西洋醫學に限られている所から漢方の 比較治療・議會請願の三段階を辿つて闘 な現れが明 治八年二 月 の醫術開 業試驗

政治が優位に在ることを見極めずに敗退した。

政治が優位に在ることを見極めずに敗退した。

政治が優位に在ることを見極めずに敗退した。

政治が優位に在ることを見極めずに敗退した。

路を正しく衝き論戦上の終止符を打つた。 の社會醫學としての價値なきを指摘して漢方の本質的な缺機績に就てと題する演說は資本主義社會に於ての兩醫學の繼續に就てと題する演說は資本主義社會に於ての兩醫學の

去られたのは歴史的必然の姿であつた。本主義發展の方向に對して何等プラスする所なき漢方とそ本主義發展の方向に對して何等プラスする所なき漢方とそれ清事變を契機として帝國主義的段階に突入した明治資

漢方を再編成し、近代醫學と統一する方向を新しく見出すべきことは明治漢方の段階に在つては遂に望み得ぬことすべきことは明治漢方の政治を持足の政治を表して、

本號執筆者紹介

(掲載順

龍野 出出 鮫島 大鳥蘭 三木 内山 清水藤太郎 石 藤井 緒方 小川 中 Щ 原 野 峼 近二 平太 尚久 富雄 鼎三 孝一 三郎 雄 榮 明 操 佐 評議員 理 理 醫學博士、 幹 理 理 理 理 理事長、 理 理 理 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事、 東京・文京區春木町 藥學博士、東邦藥大教授 東京醫齒大講師 橫濱醫大講師(醫史學 慶應大學講師 東京醫大名譽教授 東大教授 醫學博士 日大教授(生理學 關西支部長、醫學博士 醫·
法學博士 東大教授(解剖學) 東京・新宿區下落合 (血清學 (醫史學

雜 報 2

本年九月十三日より二十日まで、第十四回國際醫史學會議開催

及 しそうもない。 いるが、 K くであ 本會あ U 年九月十三日より二十日まで、 7 v 目下の處わが國からの參加 7 ル K ノに於いて開かれる豫定。 プログラム等を送附してきて 今度の會議の役員は次の如 加は實現 P 3 1 0

President, Adalberto Pazzini.

Vice Presidents, V. Busacchi, N. Latronico, G. Pezzi, L. Premuda.

Members, E. Apollonj. A. Botto-micca.G. Del Guerra. P. Micheloni. T. Oliaro.G. Spina. E. Sofia Vaccaro.

・前記「國際醫史學會」に本會理事、東大教授小川鼎三博士を本會の代表者として推薦 でることになり、本會の推薦狀を日本學術 の支援を引き、東大教

指定の醫史學關係文化財

、從來の國寶は重要文化財の名に變り、昭和二十五年に 文化財保護法 が 制定 さ

史學關 く指定 指定 祕 府 K され 略 貴 係の され 重 卷第 なもの 3 た國 8 2 八百 0 質及び は左の如くである。 0 二六十八 なっ み別に新しく國實とし 重要文化財のうち醫 た。 (紙背 今日までに新し 秀房對策 ~

新修本草 黃帝內經明堂 計五卷 以上昭和二十七年三月二十九日指 案等) 書寫及び永德三年書寫) 東京·目黑 京都·御室 卷第四·五 卷第一零本二卷 前田育德會 ・十二・十七・十 仁和寺 (永仁四年 定 九

以上昭和二十七年十一月二十二日指定 京都・御室 仁和寺

でえト系区長ず、四二卅、真宮・生日、 沢上昭和二十七年十一月二十二月指

以上昭和二十八年十一月十四日指定(香籽源外臺秘要方 四二册 東京・世田谷

要文化財

者 ての權威書であること言 より成る。 は特殊醫事法制史として醫育 山時代まで、 前編は一般醫事法制史で奈良朝以前より 醫史學の 册で内容のよさは勿論、 (公刊され 本會前理事長山崎佐博士の の一讀をするめ 江戸期前日本醫事法制の研究 研究論文は戦後全くみら 醫事法制史としては た。 本書の主要部分であ A 5 判 る。 本書以上の 六七五頁 玄 ま たない。 . 救 わが國 」出版 に及 る。 n 療の二部 が 大きな な べぶ互 初 後編 桃 1

中外醫學社發行、千五百圓限定版

和 蘭 醫 話 の 研 究

內山孝

はしがき

として傳えられた西洋醫學のなかの生理學についてであつた。それらはいずれも先人の苦心になつたものであるが、 私は約 二十年に亘つてわがくにに於ける生理學の發達について研究して來た。その間に主として研究した部分は、

多くは翻譯とその註釋にとゞまるものであつた。

本とについて詳しい研究をして置きたいと思うようになつた。 れていることを知つた。このことは私にとつて一つの大きな喜びであると共に驚きであつた。そして私はこの著者とこの それらのうちにあつて、伏屋素狄の著わした「和蘭醫話」と題した上下二卷の本には著者の實證的な生理學の研究が盛ら

もあきらかにして置かなければならないと思う。 來た。これは實に不思議なことである。 の文化史の上から見てまことに珍重しなければならない内容をたくさんにもつていると思う。その重だつたところだけで (一八○五年)に上下二卷の板本として刊行されているのに拘わらず從來殆んど着目されなかつた。私はこの本がわがくに ところが今まで、この本の内容の價値について、その著者のことについても、殆んど世の中に知られないまゝにすぎて けれどもこの本の内容はまことに卓れたものをもつている。 この本は文化

と倶に、その時代の文化一般によつて規定されると同時に逆にその時代の文化一般を規定するところのものであると思 科學史は科學文化史として文化史の重要な 一部を形成しているのであつて、それは宗教・哲學・文學・藝術

このような立場からわがくにの科學文化史の研究に眼を向ける者にとつて、 この本は見遁すことのできないものであ

和蘭醫話と伏屋素狄の輪廓

かである。そしてそれを機緣として著者は自ら實驗的研究にまで突き進んで行くようになつた。 じめは大いに疑い、後大いに感激するようになつた彼の心の中の大きな動揺の有様は、 の著者伏屋素狄が杉田玄白譯として出板せられた「解體新書」五卷を讀んではじめて西洋醫學の一端に觸 和蘭醫話の著者序文によつて明ら は

それについて私どもが傾聽してもよいと思われる意見も記されている。 種の本が飜譯され出板せられた。併しこの本は飜譯ではない。こゝにこの本の獨特なところがある。 は同 和蘭醫話 じ時代の蘭學者からの聽き書きもある。またこの本の名とはまるでちがつた漢方醫術についての話もある。そして の出板は解體新書が出板されてから約三十年を經過している。從つてその三十年間に多くの蘭學者によつて諸 もとよりこの

於てこの本の著者は山脇東洋●賀川子玄●華岡青州などに比肩させてよいだけの學問上の價値を充分もつていると思う。 始末である。 ゞある。 れてから百五十年にもなるのに拘わらず殆んど彼について研究されたことがない。私の研究が正當な意味に於てはじめて ところが著者伏屋素狄についての傳記はどうかというに今まで殆んどわからないまゝに過ぎて來た。 しかしこの本の一番大切なところは著者の獨創的な實驗的研究が記されていることである。すなわち獨創に富んだ點に 從つてこの本とその著者がわがくにの文化史上、科學史上に於て當然占めてよい正當な位置が與えられていない 和蘭醫 が出板さ

のはつきりした學統がわからないことなどがそうした運命をもつようにはたらいたのであろうと考えられ 私がしらべたところでは、今までにこの本と著者について記されたことが前後三囘ある。けれどもそれらはいずれも至 これはこの 本が江戸で出板されないで關西でなされたことゝ、この著者が關西だけに住んでいたことゝ、蘭學者として

___(44)___

篇より三篇に至る各二冊。 刊 に止まる。 つて簡單なもので到底その學問上の價値を正當に示していないのである。古いところでは「西洋學家譯述目錄」(嘉永五年 一八五二年)の二十一丁表に『万町琴阪、名は素狄、字は權之進と稱す、本姓は伏屋、 和蘭簡方』とある。 これは大體に於て和蘭醫話の下卷奥付きに記されていることの寫しの程度 和泉の人。 和蘭醫話 初

空白のまゝとなつている。 次に大槻如電翁の「新撰洋學年表」の文化二年の條に『和蘭醫訣、 和蘭醫訣とあるのは和蘭醫話の誤記、 また池道富は池高道の誤りである。 伏屋素狄口授、 池道富筆録』とあるだけで、 その

らなかつたことを恥ずかしく思う。 この本と著者紹介の全部であると思われる。そうはいうものゝ實は私も今から十年ほど前まではこの本のあることさえ知 て紹介す』とあり、 最近では中野操博士の「皇國醫事大年表」の享和三年(一八〇三年)の條に『伏屋素狄、 また文化 一年の條には『琴坂先生日述、 和蘭醫話』とある。 すなわち右に記したことが、 和蘭醫話。始めて帝王切開術 從來なされ に就 た

板せられてい この本の大いさは美濃判(縱二五・六、横一七・七。墨付 五十葉から成る。文體は候文で對話風になつている。耕文堂(恐ちく著者の堂號か)藏板で、京都と浪速の本屋から出 縱一九•七、 横一四・六cm)で、上卷は二七葉、下卷 (45

なつて漸く蘭學に着眼するようになつた。 て多くの疑問をもつようになつた。そして約三十年間も疑いをもちつゞけ迷い拔いた擧句、 働きについては漢方醫書に說かれているところが明確でないことがわかつて來た。そして漢方の內景說 を學んだという。 著者は伏屋素狄 泉州万町 出身の醫家であつて浪速に寓居していた。著者の序文によれば、 いつどこで誰について學んだかは記すところがない。併し漢方の醫術を學ぶにつれて人體 であることは前述したところであるが、また万町權之進ともいつた。琴坂先先というのは號でもあろう 年二十の頃から醫に志して始め漢方の醫術 やがて五十の には 坂にかゝる頃に 永 の構造とその い間 に亙つ

そして前述したように先す杉田玄白譯述の「解體新書」を讀み、次で字田川明郷の譯した「西説內科撰要」を繙き、 更にま

ような結果を得たのであつた。 と實驗を重ねて大いに發明するところがあつた。このようにして彼自らの研究方法によつてこの本の中に發表されている そこで彼は更に進 んで動物の生體解剖を試み、 それによつて各種の器官の働きが如何ようになつているかについて觀察

ということはこの本を讀んで見れば察せられるのである。 るところの重要な點を直ちに自家の薬籠中に納める力に至つては一般の蘭學者といわれる人々の敷段上にあつたであろう も思われるが、 またこの本を讀んで見ると、『ブランカールツ曰く』として引用しているところなどから見れば蘭文も讀解できたように 著者の語學力がどの程度のものであつたかはわからない。併しその眞髓を讀みとる力、 そこに書かれてい

の原稿は少くとも享和三年またはその以前に成つていたということである。このことは後に述べる大矢倚齊の 人解剖圖」とも關係があるので記しておく譯である。因みに享和三年は前野良澤が八十一歳で歿した年に當る。 本書は文化二年の出板であるが著者序文は享和三年(一八〇三年)に成つたもので、この點から考えられることは、 「寛政の婦 本書

ものである。 序文の次に目次があり次で凡例が著者の弟子によつて記されている。凡例はこの本の成り立ちについて物語るところの

もつて書の名とす。 横周、 (後略) 池高道等、 此の和蘭醫話も其中のひとつなり。(中略)且つ和蘭醫話という書三編あり。今刊するものは其初編 我が琴坂先生に問いしことども、 先生詳らかに答えありし話を筆記したるもの許多あ

この凡例の次から本文がはじめられている。文文のはじめには次のように記されている。

「和蘭醫話

琴坂先生口授 門人橫 周 筆記』

文化二年であるから著者五十九歳のときに當る。 先生口授として「和蘭醫話」ができたのは享和 三年で「伏屋家系圖」によつてしらべると著者五十七歳の頃で、 出板は

伏屋素狄の實驗的研究

のについて記しておきたいと思う。 ている。斷片的と思われることもこの本をよく讀んで見れば興味のつきないものがある。私は主として生理學に關するも ようであるがそうではない。この本の中には解剖學・生理學・藥理學・治療などにわたることが相當に系統的に述べられ 和蘭醫話 」の中には凡そ三十餘りの 話が載せてある。 而もそれらを一見しただけでは種々雑多であつてとりとめがない

私は先ずはじめに著者自らに物語つてもらつてその後で私の考を述べようと思う。

心の臓の話

御尋ね御尤もに候。不侫もはじめのほどは足下の御尋ねのごとく此事を怪しく存じ候ひき。今、西洋の説、且つ直験 は、 法、 0 はせゐる細き管へ入り、心へ歸り候。此管の通り筋を血脈と申し候。是は動脈とは違ひ動き申さず候。 心の臓より血を出して諸絡を廻り、其廻り終りの處の至つて細き管の端より又それに添ひてその端に端とはしとをあ 心の臓と申すは、人一身の主宰にしてもろもろの意識動作みな此臓より出でざるものなく、儒佛其外諸道とも、 |々瓣と申す物これあり候。これは心の臓へ逆行し歸る血を後へ戻さぬ様にいたし候器にて候。いか様の細き處にて 事左に申し入れたし。 それとも相違い申し候様に覺え候。いかなる事に御座候や明らかに御示しを承り度候。 善心悪心などとことごとく心にあずからぬはなき様に承り罷り有り候。然るに平日の醫譚に、 心の臓の事、これ血の集る處の會所役目にて候。 動脈と申す常に動き居る血の通る袋管へ、 此管の裏面は

らんに、意はいか様に靜かならんと欲しても、脈の動は、熱によりて滑・大・敷・急になるを以てもしるべし。 天地の氣に應ずる事にて、一邪氣これに冒さるれば、平常のかたちとは變る事に候。 にして意識動作これより出るものならば、其動かんと意ふときは動き、靜かならんと意へば靜かなるべき道理にてあ はこれあり候へども、 り。其動き候とほり此寸口のあたりまでも同じく動き申し候。尤も同じ血の通り筋なるに寸口と尺澤とにて動の小差 て動脈は始終動き居り候。これが寸口にて浮・沈・遅・敷など候がひ候ものに候。 も此瓣はこれあり候。能き細工にて候。瓣は諸方に在る處あり。第一に此物も觀、 大抵は同じ事なり。 熱の表裏によりて差々する事、誰もしりたる事に候。心臓〔は〕一身の主宰 天地はふいごにて心の臓の 此理も明らめ申し度き事に候。扨

漢人の心の字を用ひて意の事へ係けたるは心の臓は、人軀の正中に居するを以て心にたとへたる事にて、臓へかけて ふにもあらざるべし。唯、中心といふ事と御心得あるべし。漢人も仲景氏は心下痞、心下硬、心中痛など論ぜし。 譬論したる物のみ。 胸の部位を指したる物也。 俗にいふにも、 胸のわるき人又ははらあしき人などいふ。皆、 臓にかけたるには非

ない。彼は血液が心の働きによつて大動脈に驅り出され、それが動脈の枝分れによつて次第に細い動脈へ至り、遂に毛細 ては記していない。彼は靜脈瓣のことにも觸れ、これが血液の逆流を防いでいると記している。 血管に入り、それから血脈つまり靜脈となつて心臓へ歸つて來ることを述べている。但しこゝでは體循環と肺循環に分け 著者はこの條で血液が循環することをその當時の西洋の學說と著者の『直驗』によつて述べている。この記述は誤つてい

て血液循環の中樞であることを明らかにしている。 の府ならば、 從來漢方では心臟が意識動作の出るところといつているのは誤りであることを證明している。すなわち心臟が意識動作 心の働きは私どもの意志によつて左右される筈であるのにそうはならない。心臓は意識の宿る座ではなくし

うような記述はそれに當る。まさに飛躍であつて、天地の氣と心臓の働きとの直接のつながりは實證されていないのであ このような『直驗』を重く見る著者にも觀念的な考えに陷入つている場合もある。心臓の働きは『天地の氣に應する』とい

腎臓へ吹き入れたのである。その管はどのようなものであつたかわからないが、管をさし入れたところは腎動脈であろう 傳つて膀胱 入れられたと思う頃を見計つて管を抜きとり、 と思われる。 用いたであろうと思われるが、 腎臓の機能についての實驗的研究は特に卓れている。 の方へ流れて行く狀況が見られる。 あるが、 へ墨汁を吹き入れる前に豫め膀胱を壓迫し内容を空虚にして置く。そして腎の中へ墨汁が相當の それにもましてその實驗方法には獨創的工夫がなされている。實驗材料には恐らく動物を生きたまゝ 如何なる動物を用いたか、 腎を外から壓迫して見る。そうすると墨色の全くない澄 腎は血液から尿を生成する。それは漉過によるとい 生體解剖かどうかの點も明らかでない。 彼は管をもつて墨汁を んだ水が輸尿管を 彼 量吹き 0 漉過

になっていることがよくわかる。この實驗は唯一度だけ試みたのではなく幾度繰返して見ても、 た のであ 腎はどのようになつたかといえば、 外から見たところでも眞黑であるが、これを截り開いて見ると、 4. つも同じ結果が得られ 内部の方まで眞黑

れない。併し彼の學説の提出されたのは百五十年前のことであつて、 か イツヒ 0 濾過 るであろう。 そこで著者はこの實驗的研究を根據として腎は血液から尿を生成するものであり、 の逆 る 説に先き立つこと約三十五年であつて、 吸收説は 私はこれを伏屋琴坂 學說は日新月歩するものであるから琴坂の漉說も亦今日から見れば原始的な學說であるとい 一八四四年に提唱せられ、 の尿生成に 闘する漉説と名ずける。因みにボーマンの これをもつても著者の着眼の如何に非凡であり、 ハイデンハインの分泌説はずつと後のことである。 それを今の學説のように錯覺するから出る評である その仕方は漉過によるのであると述 濾説は 獨創に富 一八四 伏屋 0 一年に、 漉說 んでい われるかもし は るかどわ ルードウ 1 2

黑き分は血にて、澄みたる白汁は小便なりと申す事、 残り、右のベッケンと申す管紐へ澄みたる水通り出るなり。 を吹き入れ、腎臓へよほど墨汁いりたると思う時、管をぬきとり、手にて腎臓を握りしむれば、墨汁の色黑き所は腎中に 水を尿に見立てて、 役なる事掲るしきに、漢人數百員、腎は精汁を醸し成す職と心得違い候て、陽道の衰えたるを腎虚などいひです。 にて正黑になるものなり。それを截りて見れば、內面のくろく浸みこみたるもしるるなり。斯様に明らかに腎は小便漉 通るを透きて見つべ したりするよりも寧ろ彼の研究の仕方の獨創性を尊重し敬服するものである。 獣 類にても其の驗徴を觀るに、 併し重要なことは彼の漉説よりも彼の行つた實驗的研究の實際にあると思う。私は伏屋零坂の漉説を高く評したり賞揚 道より洩れ出るなり。 し 此のひもを通る水また萎みたる膀胱いつばいに張るなり。それを握りしむれば此の水、 此の法また腎へ墨汁を吹き吹き絞り絞りて試みるに幾度しても同じ事なり。 先づ膀胱の小水を握り絞り出し、 直見にわかるるなり。 (中略)此のひもの外よりも其の黑からず澄みたる水の 膀胱を萎ませ置き、さて腎の臓へ管にて墨汁(中略) 右の験しるし 左に原文の要點を摘錄しておく。 を試觀したる跡の腎は外も内も墨汁 此の墨汁の 下りて

を費す事、氣の毒笑止千萬に存じ候。

で滿足するより外はないと思う。 道が見出されな 残念なことであるが今となつてはどうも致し方がない。 右の記載は先に述べたように甚だ簡單であつて、これだけでは到底その詳細のほどは 知ることができない。 いのは遺憾である。 それはそれとして、凡そのことは右によつても知られるのであるから、 右の記錄を讀んで疑問百出するのであるが、 それらの 疑 應それだけ 如何にも 問 解決 0

え候。食物を消化する大用の汁にて候」と記されている。 處の中へ膽の管紐入り之れ有り候。腸をひらき置き候て、 そして腎で行つたような實驗的研究は他にもなされている。例えば膽汁の分泌についてである。卽ち「十一 膽を握り絞り候えば膽汁此の管ひもの竅より出る事明らかに見

朝

病

言

木

榮

緒

將叉民族の發展に甚大な障碍を招來する。よつて疾病の發生を防ぎ病苦を除き民力を伸張せんとするは、 であり、 まねばならないが、 る。 並 歷史的 正に社 疾病の發生は個人の生命を脅かし、 これは醫史學に賴らねばならね。 會の大きい慾望の 病理學なる疾病史は、 牛面必要とするはそれの起原及び流布。それの病理及び治法。 一つである。 醫學の史的知識である醫學史に次いで、 而して疾病を防ぎ除くには、 家の生活に支障を來たし、 日進月歩の現代新醫學に據り研究を積 社會の機構を亂 醫史學上研鑽すべき重要部門であ これらに對する史的 Ų 國 0 政治經濟 知識 (51)

對しては特に重要知識を數多供給する。 相互比較考察をも爲し得て新知見を展開し、 島自體 以下、 朝 鮮 引いては政治家・經濟家・宗教家・文學者等に對しても深い關心を抱かしめる。 4 の疾病の様相を明かにするだけでなく、 島 の疾病史は全く知られてゐない。 引いては廣く世界に向つても参據の資料となり得る。 東亞疾病史闡明の上に資すること甚だ大で、 この研究は半島の醫家並に史家に有力な知識を供給する許りで 半島は大陸と日本との懸橋的位置に在る關係上、 然もこの研究は、 隣國日 その疾病の 本 中國 4

學史」と同樣全く未開拓の分野で、 筆者は半 島に於ける疾病史を編述し、 論中に謬見と疎漏が含まれることゝ惧れる。切に忌憚ない叱正を與へら 識者に提供しようとする。併してこの疾病史も、 前 編 0 醫

んことを乞ふ。

前 1 二章の『三國及び新羅一統時代の疾病』及び『高麗時代の疾病』は、これらの時代に於ては據るべき資料は乏し 本史編述に當り、 一章のことをも引振し、 敘述は粗雑なものにならざるを得なかつた。依つてその缺を補ふために、後章の『李朝疾病史』に於ては 時代觀を把握せしめようとして、『目次』に示したやうに全篇を三章に別つた。而して前 朝鮮全體の疾病史の體裁で編述した。三章合せて通讀を希ふものである。

第一章 三國及び新羅一統時代の疾病

第一節 疾病史 附 日本の疫病との關係

を以てする。 與へ、一國に於ての重大事件であつたからである。 40 L 然して疫病だけは史籍に散見せられる、と云ふのは、疫は急激に多數の人を犯し、 それらに就いても可なりの知識を有してゐたのであるが、 國時代及び新羅 一統期にては、 疾病にて特筆されるは疫病である。 依つて疫を第一に採り上げ、 「三國史記」等の史籍に見られるは皆無に 勿論疫の外に種々なる疾病が存在 附するに一般疾病(第二節) 社會に多大の恐怖を 近

首に疫病流行の年表を掲げ、次いで上代の疫に就いて考察を加へる。

第一項

百濟 (年紀の間に、日本及び中國の疫病流行記事も相關連すると思はれるものは挟み、参據に供する。 溫祚王 四年(西紀前一五) 春夏旱シ、饑疫アリ。

疾烏上代

0

新羅 南解次次雄 (1111) 是蔵、大疫アリ人多ク死ス。冬十一月、氷ナシ。

新羅 祗摩尼師今 (1二〇) 三月、 京師ニ大疫アリ。

逸聖尼師今 (一四九) 十一月、雷アリ、京師に大疫アリ。

新羅 新羅 阿達羅尼師今(一七二) 二月、始祖廟ニ事アリ、京師ニ大疫アリ。

新羅 奈解尼師今 (二〇三)

十月、桃李華サキ、人二大疫アリ。

百濟 仇首王 十六年(二二九) 十一月、大疫アリ。

建安廿二年(二一七) 是歳、 厲氣流行ス、張仲景「傷寒卒病論」ヲ撰ス。(後漢未ニ疫病大流行ス)

中國

九年(三五六) 十二月、雪ナク、大疫アリ。

小獸林王 (三七七) 建武元年(三一七) 十月、雪ナシ、雷アリ、民ニ疫アリ。 是蔵、痘瘡中國ニ入ル。(陳氏「中國醫學史」)

六年(三八〇) 是歳、大疫アリ。

正月、京都ニ大疫アリ。

慈悲麻立干 (四七二) 奈勿尼師今 (三八九) 十月、大疫アリ。

炤知麻立干 (四八三) 廿一年(四九九) 夏、大旱。十月、大疫アリ。 十一月、雷アリ、京都二大疫アリ。

百齊

武寧王

二年(五〇二)

春、民饑エ、且ツ疫アリ。

百齊

新羅

新羅

新羅

百齊

近仇首王

高句麗

中國

高句麗

中川王

六年(五〇六) 春、 大疫アリ、夏、民饑ウ。

百濟

高句麗

五年(五三五)

中國 大清元、二年(五四八) 梁

日本 日本 欽明天皇 十三年(五五二) 一四年(五八五)

高句麗

中國 唐 | 世紀 | 六四三 九年(五九八)

中國 新羅 唐 景龍元年(七〇七)

聖武天皇 十三年(七一四)

日本

日本 聖武天 七年(七三五) 九年(七三七)

景德王 六年 (七四七)

十四年 (七五五) 春、

新羅

新羅

日本

元聖王 天平寶字七年(七六三) 十二年(七九六) 六年(七八五) 春、 四月、

新羅

十二月、雷アリ、大疫アリ。

楊州。 ヲ燒ク。 徐州。兌州。豫州一帶三旦リ厲疫アリ。(井村氏「中國疫厲考」)

ク、後又佛像ヲ燒クノ罪ニ歸ス。二月、之ヲ佛法ノ故トナシ、佛像佛殿ヲ燒二月、國ニ疾疫行ハレ、民死スル者衆シ。三月、之ヲ佛法ノ故トナシ、佛像佛殿ヲ燒

隋帝高麗ヲ伐ツ、師、 遼水ニ至リテ疾疫ニ遇フ。「(隋書)

地ヲ侵ス。(井村氏「中國疫癘考」)

山東・陝西・河北ニ疫癘流行ス。 (同上)

夏、旱、 疾疫ノ人多シ。

疫瘡、 天下ニ遍ネシ。 春筑紫ニ發シ、 夏ヲ經テ秋ニ渉リ、 再ビ天下ニ遍ネシ。

是蔵秋旱ス、 冬雪ナシ。 民饑エ且ツ疫アリ。 使ヲ十道ニ出シテ安撫セシム。

民饑工、 疫癘アリ。

正月、 京師飢疫ス、倉ヲ發シア脈恤ス。 王忽チニシテ疾疹ニ遭ヒ、 十三日ニ至リテ薨ズ。

壹岐島疫ス、之ヲ賑給ス。

以後全國ニ飢疫アリ、

翌年二旦ル。

疫の諸名稱

平城天皇 文聖王 興德王 三年(八四 八年(八三三) 二年(八〇七) 春、 十二月、筑前ニ疫病起ル、以後飢疾全國ニ及ビ翌年ニ亘ル。 京師ニ疾疫アリ。 國内大イニ飢ウ。 十月、桃李再ピ咲キ、民ニ疫死多シ。

日本

日本 是歳、 京邑ニ赤痢ヲ患フ者衆シ。十歳以下ノ兒ニシテ染苦シ死者衆シ。

清和天皇 三年(八六二) 去多末ヨリ京城及ビ畿內外ニ多ク医道ヲ惠ヒ、死者甚ダ衆シ。渤海ヨリ傳へタリト云

日本 清和天皇 四年(八六二) 五月、京師ニ疫アリ。

景文王 七年(八六七)

景文王

十三年

八七三

春、

十年(八七〇) 冬、 雪ナシ、國人ニ疫多シ。 民饑エ且ツ疫ス、使ヲ發シテ脈恤セシム。

高麗太祖元年((九一八) 饑饉至リ疾疫起ル。

八月、

新羅

疫 0 槪 念 A

疫には各種の名稱がある。疫疾、 疾疫、 疫病、 疫癘、 癘疫、 時疫、 瘴疫、 瘟疫、 惡疫、 毒疫、 疫氣など、

叉、 時氣 時行、 天行なども之に當る。

多數を侵すもの、 疫とは、 廣く流行する傳染病の謂である。富士川師は、 」と定義してゐる。中國の古書にも次の如く解いてゐる。 『疾病中、一定の時期に同様の症狀を以て國民の

皆相似、 溫熱等病相類、皆由一歲之內、節氣不和、 「說文」曰、『疫民皆疾也。」「說文釋名」曰、『疫役也、 如有鬼癘之氣故云疫癘病。 寒暑乖候、 或有暴風疾雨、 言有鬼行役也。 霧露不散、 『病源候論』日、 則民多疾疫、 『疫癘其病、 病無長少、 與時氣 率

厲に通じ、 悪とは、 厲氣は疫病神、 悪い病氣のことで癩と同義である、然し現代の癩病のことでなく、廣義に惡性疾患を指す。 疫は鬼行の役に當る。從つて疫癘は惡性流行傳染病のことである。 癘は

且はる上 つ漢疫世 廣然のに いと釋け

> 等に載 示す如 尼 於てである。 禮記月令」にも疫に就いて之と同樣の記述が見られる。 疫は 師今九年 せられてゐる。 (く百濟溫祚王四年(西紀前 古代から存在してゐた。 他 大小樣 (西紀 即ち「周禮 一一〇?)である。 なの 勿論この時代の資料は稀有で 流 」天官疾醫職 行が あ 明かに流行が人々に認められ、 0 一五?)であり、 たと想像され その後、 に『疾醫掌養萬民之疾病、 新羅 る。 之に次ぐは新羅南解次次雄十九年 然も記錄の不完全の致す所、 統期の末 朝鮮で文獻上初めて疫が流行したのは、 (西紀九三五)まで二十六囘の 几 留記されるに 時皆癘疫」、 とあ 至つたの 上掲のも 5 (西紀二三?)、 その は、 のに止まつてゐる 流行が「三 他 中 呂氏 T 上揭年 は 新羅祗 周 一國史記 秋 」及び 摩

單に疫 に於 推 8 年 使 死 行 威 7 と見 を與 用 性 0 定される。 春 而 正 2 して右 を漸く指 節 或はそれの 月 は發疹チ 做したこともあつた。そして後世に至るに從ひ、 傳染病 圍 特に注 疾疫・癘疫などを以て充てられてゐるのである。 は狭 記 Ŧ 寝 0 この疹は、 められ、 摘し得る半島上古史上の 一意を換記したものと推察され フ 類似疾患をも包含し、 如く史上に書留められ 疾彌留 然も發疹の ス 腸 次第に明 略中 單なる疾疫よりは チ フ あるものを意味し、 ス 忽遭疾疹、 . 細に觀察し分類されるやうになるのであるが、 流行性感冒 然も時には饑饉に隨伴して起つた榮養不足或は障碍 たのは、 唯 0 略中 一歩前進したものであるが、 記録に過ぎな . る。 -各種 7 至十三日薨』(羅本記第九 痘瘡 この ラリア・ 0 流 上世での疫はその ・麻疹・發疹チフ この漠然たる疫も、 行性傳染病の中で、 但し新羅宣德王を死亡せしめたその疾患、即ち『六 赤痢 ・痘瘡・麻疹など種 スの 然もなほ疫病全般から症狀の異 新 概念は甚だ廣 當時 それに對する知識 類 とあるこの疾疹 で、 右にて 猖 力雜 就中恐らく 獗を極め人々に 想定 範 圍 多なものを總括して 3 に で n 天 は、 る如 各種 痘瘡を指 の増加 る死 經 亡を 過 多大の脅 からし につれ も変 J: つた 0 世 流

のことの (以上は、 續いて又第三章李朝疾病史第 一章第 項(二)『疫の概念』(B)の條に於ても、 叙述を展開する所がある、 併照

緒方洪庵歌集

緒方洪庵には和歌のたしなみがあつた。

したものをまとめて、 |庵は「章」(稀には「花陰」)と號して多くの和歌をのこした。ところがこれまでその和歌を集めたものがないので、 ここにかりそめに『緒方洪庵歌集』と名ずけて印刷にする。 散逸

佐 はある程度の選をせられ、ところどころに題までつけてくださつた。その題は()にかこんで、もとからある題と區別し 部とである。そのうち『詠草』はよくまとまつており、朱筆が加わつている。このほか短冊に書いたものなどをまとめて、 7 々木信綱先生に整理していただいた。『歌集』として發表できるようになつたのは、ひとえに先生のおかげである。先生 庵の歌稿で手許にのこつているものが四部ある。『春の卷』夏の卷』を題した三部と、『詠草』と題したもの一

和歌を御存知なら、 佐 々木先生に選をお願した後にあつまつたものは、あとで別にかゝげてある。もしもこの歌集におさめられてない洪庵 お知らせいたがけると幸である。

庵の和歌そのものはもとより論ずるにたらないであろうが、洪庵という人物がのこしたものということだけでうけい

昭和二十九年一月

n

ていたづければ幸である。

緒 方 富 雄

春

歌

癸卯元旦 億川大輔に

何事もなけれど今朝は 老が身も 初日うれしく あふがるるかな

(四十ぢを迎へたる元旦に)

踏みそむる 老の坂みち 末遠く かすむばかりの 春は來にけり

癸丑歲旦

我身世に ふるとも知らず 白雪の 積むぞ嬉しき うなる子のとし

甲寅

梓弓 春こそ來ぬれ 武の春 やたけ心よ
ひきなたゆみそ

乙卯元旦

朝風に 世のうき雲を 拂はせて のどかに春の 日は出でにけり

いたづらに としをふる屋の 松の戸も あけて嬉しき 今朝の初春

緒方洪庵歌集

緒方洪庵歌集

戊 午 立

來ては又 うれしきものを 老の身の 待たれぬ春と 思ひけるかな

完 日 霞)

初日さす 四方の遠山 うらうらと 春をみどりに かすみ初めけり

元 日

春來れば やがて花見る 心地して 雪だに今日は のどけかりけり

元 日

けふといへば さしてもこゝろ 嬉しきを 鶯さへに 初音もらしつ

水

身によする 老の波をも 忘れ井に いざや汲みてむ 今日の若水

立 春

四方の海 長閑に波も 治まれる 道を惑はず 春や來ぬらん

(海邊立春)

吹く風も 長閑になぎて よもの海の 波立返り 春は來にけり

(迎春祝世

青柳の いとものどかに 靡きつゝ 御代の春風 吹きそめにけり

君が代は 今を春べの 初日影 あふがぬくまも あらじとぞ思ふ

春さへや たちて舞ふらむ あたらしき 御代のはじめの 年の明がた

家々翫春

賤が家も 軒の注連縄 ひきはへて 樂しき御代を 祝ふ春かな

けふといへば 先づたちそむる 春霞 汲みて祝はぬ 宿とてはなし

(松迎春)

空さむみ たゞ門毎の 松にのみ 年新らしき 色は見えけり

立返る 春を迎へて むかへをの 山松が枝に 初日さすなり

薄霞 たなびきそめて 常磐なる 松にも春の 色を添へつゝ

(梅未哭)

門毎に 松はたつれど 梅の花 唉かぬかぎりは 春としもなし

緒方洪庵歌集

新

霞む野山の

色もあれど

まづあらたまる

人ごころかな

四

春立ちて

賤が軒端も

すったれし

松たてゝ

かな

けさの春

あらたまりぬる

音 知 春

瀧

花の波さへ 打そへて

音ものどかに

響く瀧つせ

春來ぬと

告げておとそふ

瀧の白波

春來ぬと

深谷の奥も

こほりゐし

初

霞

浅みどり

春たちそむる

山の

端に

にほひをそへて

立つ霞みかな

春

梢のみ

ほのかに見ゆる

をちの松ばら

棚びきそめて

春がすみ

風寒み

まださりあへぬ

冬の色を

いとひ隔てく

立つ霞かな

みふゆつき

春は來にけり

佐保姫の

かすみの袖も うちなびきつゝ

春もはや ひと日ふたひと かさねきて かすみの衣 たちそひにけり

朝日かげ たつやかすみの 染め衣 うらゝに春の 色をそへつい

今朝みれば 色さへわかず かすみけり 春もはやくや きぢの山松

(初春風)

雪はまだ ありその松の 下枝より のどかに春の うら風ぞふく

(初春山)

白雪を 霞の袖に つくませて 去年をよそなる 山の色かな

肌寒き 雪はかすみの 衣きて とほ山まゆも 春めきにけり

春淺み まだかすまねど 吉野山 まづたちそむる 花のおもかげ

春あさみ まだかすまねど よしの山 雪にも見ゆる 花のおもかげ

邊 早 春

春はまだ あさかのうらに 寄る波の

音ものどかに かすみ初めけり

ながむれば 波もあはぢも なには潟

たどうちかすむ

春の海ばら

紀路の山べに たちこめて とほくなるをの 沖ぞ長閑けき

春がすみ

初 春 篙

柴の戸も

春あけそめて このごろは ひとくと告ぐる

うぐひすぞなく

梅はまだ さかねど來なく うぐひすの 聲のにほひに 春ぞ知らるゝ

時しらぬ 松に先とや 鶯の 初音のどかに 春を告ぐらん

谷の戸は 春の立つとも しら雪に とざすかまだき 鶯の聲

春寒み 翼や弱き 鶯の 野べの霞に たちおくれたる

春淺み 我たにの戸を いでかねて よをしのぶ音に うぐひすも鳴く

(早春梅)

初雪も 花としみれば うれしきを かをりそめたり 庭の梅 か枝

とめくやとかどにぞ植ゑし 梅の花 招くばかりに はやかをるらん

早春眺望

薄がすみ たなびくかたや 初春の 立ちて越え來し 野山なるらん

見渡せば 雪の遠山 春立つと いふばかりにて 霞み初めける

子 日 松

もろともに いざやひきてん 大君の みよはひのべの 千代の若松

野若菜

春はまだ 淺澤小野の 初 若菜 雪間ながらも 萠え出でにけり

緒方洪庵歌集

澤 若

八千とせを 澤田におふる せりが根の ながきにそへて 摘まんとぞおもふ

春

室はまだ はれねど月の 照らすまで にはおぼろなる 春の夜の雪

春くれば やがて花みる こゝちして 雪さへけふは 長閑にぞふる

寒 月

夜嵐に かすみの衣 ほころびて そどろ寒くも 見ゆる月かな

簡 若菜)

萠え出づる 野邊の若菜に 老が身は としもたぐへて つまむとぞ思ふ

冠 上霞)

波の上は、そこともわかず かすみつゝ 春もふか江の みどり色添ふ

關 路

よにあふ坂は 春霞 とざすぞ關の しるしなるらん

のどけしな 深谷を出でて がけ高き 梢に移る うぐひすの聲

八

かすむとも またうぐひすの なかぬまは こころに春も しられざりけり

花の香も かすみの色も うぐひすの 音をそへてこそ 長閑けかりけれ

鶯 出 谷

谷の戶に けふ聞き初むる 鶯や 高きにうつる 初音なるらん

庭に鶯の鳴くを聞きて

日にそへて 鳴く音加はるうぐひすに 野山の春の ほども知れつい

(野路鶯)

春の日の 長閑きまゝに うぐひすも うかれいでてや 野路に鳴くらん

(山路鶯)

こゝろなき 賤も行手を なづまゝし こゆる山路の 鶯の聲

霞 中 鶯

そことなく かすめる野べの たかむらに さやけきものは うぐひすの聲

緒方洪庵歌集

丽 中

うぐひすの 聲しめやかに 春雨の ふる屋をしめて 軒端にぞ鳴く

松 上鶯

花とりを まつの下いほ なぐさめて なくかこすゑの 今朝のうぐひす

等をつどへて宴しける時よめる二月十七日夜、大隈玄道、佐久 佐久良東雄、ふる田土子、大田崎村

花もなき やどなりながら 言の葉の にほひ満ちたる 此夕べかな

ふたとせに かけてぞらふ 梅の花 たぐひあらぬは 色香のみかは

若 木

わがうるし 若木の梅は 咲きにけり さかり見るべき 春やいく春

河 邊

河水に 影をながして 咲く梅の にほひのよどや いづこなるらん

夜 梅 遠薰

風かをる その疑の 雲はれて 月ににほへるをちの梅ぞの

暗 夜

香をとめて よりこそ來つれ 明くるまの やみの宿かせ 梅の花かげ

梅薰枕

にほひ來て 枕にかをる 梅が香や 見果てぬ夢の 名残なるらん

栽梅待鶯

植ゑし此の 梅はたか木に ならねども 早くもうつれ 谷のうぐひす

多少梅

野邊は今 さかりと梅の 匂へども いかに軒端の 花のすくなき

梅迎客

殴く梅の あくがるゝ とへかしと 香にこそ人は いふもをこなる 柴の戸を おしひらかする ぬしのころを 色に出でて 人や誘ひし 問ひもくれ 散りなん後を いかに偲ばん 梅の下かぜ 軒の梅が香

梅風

吹きてこそ なかなか花に 嬉しけれ 梅が香さそふ 春の山風

(月前梅)

降る雪に あえて咲きしを きさらぎの 月さへ友と 匂ふ梅かな

梅花久芳

疾く咲きて なほ大かたの 春をさへ 香にしめてこそ 梅はにほへれ

緒方洪庵歌集

梅 薰 夜 風

夕月の 影まだくらき きどのうちに 春吹きいるゝ 梅の初風

咲きそめし 梅はいづこと わかねども さよの春風 ほのかをるかな

とりならぬ 人もこそ問へ 君が名の 香さへしるけき 瓶の梅が枝 秀香うしの宴にまゐりけるに、瓶に鶯宿梅といへる花のさしてありければ

おぼろ夜の 面かげながら あはれさはをぐらき花に 有明の空

山 の端に 月もしらみて ほのぼのと 長閑にかゝる 花のよこ雲

ありあけの 月しらみ行く 山の端に ほのぼの匂ふ 花のよこ雲

春 風

吹くとしは 知らねど靡く 青柳の 糸にそれかと 見ゆる春風

ことならば 花にさはらで のどやかに 香を吹きおくれ 春の山かぜ

山 家 春曙

よにしらぬ 春のあはれを あけばのの 空にぞしむる 山ずみの庵

湖上春望

しがの花は さもこそあらめ から崎の 松にも春の 色は見えけり

(春))

勇しき 聲も聞えて 若草の もえいづる野に あるゝ春駒

青柳の いとや繋ぐと 見るまでに 澤べの駒の たちも離れず

霞 中 雁

こゑさへに つゝみはてなば 別れをも しらじを雁に うき霞かな

去雁遙

聲のみは それと雲居に 有明の 月にかすみて 歸る雁かな

春雁向北

散りそむる 南の枝の 梅みてや たのむの雁は 北にたつらん

柳辨春

静けくも たるゝ柳の 糸にこそ ながき春日の 色は見えけれ

柳繁隣家

植ゑしこの 垣ねの柳 茂りても こころしたしき 中なへだてそ

柳

前

みだれぬ糸の 月影に

風をなみ

ありとは見えて

かすむ青柳

うりけるかな

はりかとばかり 川添の やなぎの糸に か

夕月は

(薄 暮

葉をわかみ 雨にしをるゝ

青柳の いと静けくも 日は暮るゝかな

遲 日

名若 草

青柳の 糸にいとゆふ うちはへて 日はなりにけり

ながくも春の

滴

うちけぶり 小雨降るなり そがひ野の 春の若草 萠えまさりつゝ

うちむれて 少女が袖を ふるの野に すどなのつぼみ 摘はやすみゆ

樵 路 早蕨

重きまで 柴にわらびを 折りそへて 歸さいそがぬ 春の山人

蔵を折りておくるとて

花の下かげ さわらびの もえて待たるゝ

思ひとをしれ

今ぞ咲く

四

(春月)

叉や見ん 花につらなる 雲間より 匂ひ出でたる み吉野の月

誰か見る 浮世の中の 音も香も 霞のへだつ 春の夜の月

志賀の浦や 殴く花を わきて出でつゝ かすみて月の 谷間の杉の かげだにも 出でにけり さりげなく にほひて見ゆる 今や氷も 光をつゝむ 解けわたるらん 月のゆか 春の夜の月

旅宿春月

草枕 たびねの袖に 宿る夜は 月さへいとじ おぼろなりけり

(春 雨)

若草の 我宿は 軒の玉水 萠えいでし野に たまたまに 春雨の おとづれてのみ うちけぶりつゝ 春雨のふる 今日も降るかな

(朝·春雨)

朝まだき 夢のなみだも ほしあへぬ 枕にかよふ 春雨の音

(夜春雨)

降 るしとも 知れねどいとど 春の夜の ねぶりをそふる 軒の玉水

(雁行く)

ここを捨て いづこの春に あはんとか つれなく雁の たちて行くらん

ともすれば むかしわするゝ世の中に 雁はこし路を たがへずも行く

月 前 歸雁

惜しまるゝ かげこそ見ゆれ 鳴きて行く 雁より下に 有明の月

(燕來る)

まだ消えぬ 雪をみ山の 軒端にも 時をたがへず 來るつばめかな

(呼子鳥)

夕呼 子鳥

たどり入る 山ぢあはれと

呼子鳥

鳴くか花散る

春の夕ぐれ

道しあらば 我かと行かん 呼子鳥 花のみ山の 奥に鳴くなり

立ちまよふ 空のかすみの 薄衣 すきてぞのぼる 野邊のいとゆふ

曲 水

盃も

めぐりめぐりて 言の葉の

花の下水 ながれ盡きせじ

六

桃花如錦柳次烟

もゆばかり 桃のにしきの 匂へばか いとゞ柳の うちけぶるらん

花始開

あこがれし 花咲きそめぬ 今日よりは またともに見ん 友や待たれむ

初花

それならぬ 初雪だにも おもかげの うれしかりしを 咲くさくらかな

花錦

夕ばえに にしきをそへて みどりする 柳も今は うづもれて ひとへに花の 暮れぬともたゝまくをしき にしきをぞみる 花の本かな

禁中花

殴く花の. 下枝だに あか 香さへ御垣の ねにほひを 外までも さく花の にほひあまれる 雲の上こそ 思ひやらるれ 春ぞ嬉しき

社 頭 花

守りませぼ 散るものと よにな言はせそ 風も吹かじと 神垣を 花もたのみて 殴くかとぞ見る 石清水 神のもります 花にありせば

水 邊

散るは浮き 咲けるは庭に かげみちて 香さへ溢るゝ 花の下水

遠 望山 花 雲のかられる

きのふけふ 花のさかりか 吉野山 かはらで嶺に

麓 には いかでしられん ほど遠く 見ゆる高嶺の 花の白雲

花 下送日

あかでたゞタベあけぼの 重ねけり よをしら雲の 花の下蔭

行 路

乘る駒の むちも色香に たゆまれて 打ちおくれたる 花の下道

道のなは手の 花の色に ひま行く駒も なづむ春かな

終 日見 花 玉ぼこの

朝露の おきいでてより 見る花に いつかいりけむ 夕月のかげ

見 花 延齡

唐桃は さもあらばあれ さくらさく み國の春に 老もわすれつ

花 手 向

そがまつに 折らでたむけん 山ざくら さくも一枝の けふの初花

八八

つねにこそ 憂しともいとへ Щ 家 花 此ごろの 花の山ずみ 問ふ人もがな

市花花

さわがしと 人はいへども 風た」ぬ 市こそ花は 静けかりけれ

殴くと散ると 花にこゝろの ひまをなみ うるとかふにも たちまさるかな

雨後花

雨にして 花にあらじと思ひしも 独雨ならぬ 櫻なりけり

三月三日或る殿の御たちに花を見て

三千とせの もゝはものかは 十かへりの 松に花かす 園のさくら木

花滿山川

山はみな 雲にうかれて よしの川 浮ぶみなわも 花ぞまじれる

處々花盛

音羽山 しら雲とけてみさくれば さかりの花の 雪とこそさけ

花

あけぼのゝ色はものかは 夕月の かいる夕の 花の木のもと

ながき日も 猶暮れのこる 山の端は あけいそがせし 櫻なりけり

夕月も やどりて花の 暮れ行けば いとど雲とぞあやまたれける

夕まぐれ 梢わねかば 木のもとに 見よとや風の 花誘ふらん

憐花

おく露の おもげに今朝は 見ゆるにも いとどさくらの あはれまれぬる

家の會に野花留人といふことを

花さけば さながら人の 足とめて あら野もにほふ 春ぞ嬉しき

(裾野花)

けふも又 むかふ山路は わけもせで うたて裾野の 花にくらしつ

山路櫻

山ぢににほふ 花のかげ やすらはんとは 思はざりしを

花下送日

けふまでは あかで暮れにき ちるまでは かくて經なまし 花の木のもと

花 未 遍

雲としも まだみえねども 消え残る 雪かとばかり 花ぞ咲きける

八重ざくら

さく花の 色さへ香さへ 八重ざくら ひとへに人の よろこばしつゝ

(花下旅寢)

よしの山 花のたびねも よごろへぬ ひと日とだにも 思はざりしを

(吉野山の花を)

世々を經て 今はよし野を 言の葉の 花の山とも なしてけるかな

年毎に しをりかへても よしの山 猶見ぬかたの 花ぞ多かる

(吉野山櫻月)

みよしのの 花の下道 分けいりて 嬉しきを 月さへ峯に ころろも空に 匂ふけふかな 月を見るかな

よしの山

花のさかりも

月夜よし 夜よし吉野の 櫻花 折りてかくながら つとにせましを

連 峯

しら雲をかさねかさねて みよしのの 峯のさくらぞ 今盛りなる

(吉野山月)

いくとせの おもひかけつる みよしのの 山のかひある 月は出にけり

よしの川のほとりにて雨いたく降ければ

袖はしとどに ぬれぬとも よしやよし野の 花の春雨

旅衣

芳野の花見にまかりける時、 竹内といふ所にやどりける夜よめる 踏みたどらるゝ 夢の通ひ路

あすは見ん 花のよしのゝ わたりのみ

上市の某禪師の庵を訪て

またずしも あらじとおもふ 君ゆえに 山さくら戸を わけて來にけり

折しもあるじのあらざりければ

此いほは 耳なし山の 近みかも 問へど應へず 人おともせぬ

千本のさくらをみて

見渡せば かぞへん果も なき花に 誰か干もとと 名を限りけん

禪師と共に竹林院の群芳園に花を見て

みよしのの はざくらばかりと 來て見れば 花てふ花の 香をあつめつゝ

おなじ寺にて竹林といふことを折句にして

たぐひなき けはひみこしの 花をこそ やがて來ん日の しるべとはせめ

諸 鳥

さく花の 色のみ春に あらじとて 音をきそひつゝ 鳥の鳴くらん

諸鳥の さへづるきけば うべしこそ めしひし人も

春を待ちけれ

(峯雨雲)

花をまし 花をかくしていくたびか 降りかはり行く みねの雨雲

(松間花)

かめの尾の いつともわかね 山まつも 色めづらしき 花ざかりかな

大井川 日ごろはおほき 山まつも 色めづらしき 花ざかりかな

花埋苔

みどりそふ 苔路うづみて 夕かぜに 散るも寒けき 花の雪かな

わけいらん 高ねの花は 散りにけん 麓の苔路 雪とうもれつ

竹間花

うつろはぬ 竹にまじらば その千代に あはなんものを 散るさくらかな

山花

うたしのび わくるたもとはちる花の 雪にも濡れぬ しがの山ごえ

花浮水

散る花は 水にうつろふ 枝にだに とまりもあへず 又流れつい

川の瀬に 浮きてながるゝ 花みれば ちるもさくらの 一盛なり

嵐山に落花を見て

吹かずとも うつろふ花は 散るものを なに山の名に 風は立つらん

春の頃人の國に歸るを送りて

花に見て みやこのにしき 立返り ふるさとにこそ 君きますらめ

葦

冬もまだ うつゝにあらで 津の國の つのぐむあしに 春風ぞふく

田 上 堇

かへる雁 見ても 行きなん すみれ草 なれし田面に 今ぞ花咲く

青み行く 苗代小田に かげみえて 水もすみれの にはる畔道

(つっじ)

行ずりの 袖もこぞめに にほふかな つつじ花さく 花の山みち

(ふかみぐさ)

白たへの 卯花がきに 紅の あか裳したてる ふかみくさかな

杜 若

暮れて行く 春と夏との 中川に へだてずにほふ かきつばたかな

暮春鶯

雪まわけし そのおもかげに うぐひすは 花ちる谷を さしていぬらん

花はよし 根にかへるとも ころなき ものにやはある 園のうぐひす

暮春送別

行くといへば 春も君をや ともなふと うらやまれぬる けふの別路

殘 春

花はみな 跡なくちりて 月さへに たのむかげなき 有明の空

(春 懐 舊)

しのばるる その古を たぐへみん 月さへかすむ 春ぞあやなき

(春 祝)

瀧つせは 花にうもれて 音羽山 おとも静けき 御代の春かな

覽

ある。 和二十八年十二月現在の醫史學講座設置校及び 講師は左の如くで 本學會に於いて全國四十七校の醫科大學に照會したところ、昭

東京醫科大學 千葉大學醫學部 日本大學醫學部 慶應大學醫學部

慈惠醫科大學 日本醫科大學

東京女子醫科大學

橫濱醫科大學

群馬大學醫學部 金澤大學醫學部

名古屋市大醫學部

鳥取大學醫學部 廣島醫科大學 大阪市立醫大

> 藤 和 井 田 尙 正 系 久

大 内 鳥 Щ 崩三 孝 郎

構 尾 安 夫

石

III

光

昭

石 原 明

同

めに最も緊要な問題であると思う。

宮 大 鳥蘭 田 郎 榮

能 新 谷謙 美 保 郎

新 永 福 井 尙 武 对

> 熊本大學醫學部 久留米大學醫學部

浦 王 本 丸 政 郎 勇

鹿兒島大學醫學部

町

耶

碩

夫

られない。また醫史學だけ專攻の教授もいない。 めているところもある。 他は兼任である。また、各校とも自由選擇課目で、醫學概論を含 以上十七校のうち、專任講師は慶應大學及び橫濱醫大のみで、 獨立した醫史學教室はわが國にはまだみ

設置することになつている。現在講座のない三十の大學は、近い 將來講座を設けたい意向があつても、人事の點で行惱みのところ (84

新制大學の教育規定によれば醫史學は自由講座としてでも必ず

が少くないようである。 い世代の人々を育成することはわが國の醫史學の向上を期するた 醫史學の講義内容の規準をきめることし、醫史學を專攻する若

から會誌 1 うように る經 昨 5 年七 濟 0 なら 0 的 は 即 K 3 月 無 たも 刷など思 なかつた。 理 物 0 事 1 0 長 いもよらなかつた。 改 とム十年も會費は 本 何 任 誌の復刊も 8 ととも か 8 勝 に幹事まで 手 すぐに が 違って 錢も 變つ 計 學會 畫 微收 単は始 7 0 再出 切 しなか 8 たが、 0 事務 發 つた は思 何

徴收し メン 以上值上 くも 0 バー 金 印刷に 兼 を ねる。 集め K げした會費を拂込む會員など先ずなかろうし、 お話して快く改正會費年額八百圓也をいたど 7 までとぎつけた。 からとも考えたが、 しかし、 思い切つて東京在住の例會の 一册も 會誌 が 出 75 v 5 き ギ とちらも 0 ユ K ラー 百倍 28

力を 刊號 いて、 70 はまた考えることに 查 2 ○原稿は少くて心配するより 大册 願 から 7 學會の 5 5 K 八十 記して 70 0 K 窮狀を察して組版代負擔 75 餘頁になった。 つても出ないから、 謝意を表する。 2 た。 苦衷御諒承の上 會計 何しろ復 8 の如何を考慮して むしろ多くて 掲載 とも の寄稿者 刊 かく一册 一會員 第 市が少 老 號 増す だけ 3 は 5 背 73 順位 2 出 70 か 水 とに った 0 2 0) 7 では復 陣 K あと を布 とと 御 困 協 0

する。 十年ちかく 中恐縮 何分にも今手許に である 中 絶し が ていた總會を、 ある名簿は戰 この機會に連絡をつけ 前のもので連絡方法も 豫告の通り今年三月に强行 たいと思う。

ブ ラ 號は 1 クを 會計が無理であつても夏には出すつもりである。 埋 める意味で力作の御寄稿を乞う次第である。 石原

年

間

0

復 刊

探究書は迅速・廉價に搜してお役に立てます。何卒御利用下さい。 中越により販賣目錄をさし上げます。 私どもは多年醫學史料を專門に扱つております。 會員の方々の

東京都文京區本鄉弓町二丁目 一番地

東京都文京區森川町七九番地 (東大正 前前)

小石川

92 田

七六五五番

兵

井

1

小石川 92 上喜 喜 多 郎

東京都文京區本鄉六丁目十三番地(赤門前)

木 內 內店

小石川 92)五五七三番

本 醫史學 昭和二十九年三月 昭和二十九年二月二十五日印刷 雜 誌 第五 日 第 號

編集兼發行者

日本大學醫學部內山生理 東京都板橋區大谷口町 七

本醫史學會

石

原

明

品 西 ケ 原 0 四六

林

舍

東京都北

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the Japanese Society of Medical History.

Vol. 5. No. 1.

March, 1954.

CONTENTS

Preface·····Koichi Uchiyama···(1)
Original articles
Considerations on the "Gyl-kan" (the Chyle duct)
·····Teizo Ogawa···(3)
On the "Hitoyogiri" (one of the japanese classic
musical pipe)Tasuku Yamazaki (13)
The medical school of Sakai and its masterMisao Nakano(19)
Studies on the "Oranda-Iwa" (the experimental studies
on the functions of the kidney in Edo era)
·····Koichi Uchiyama···(43)
Studies on the history of diseases in Korea $\cdots\cdots$ Sakae Miki $\cdots (51)$
Report
Japanese medical history at the earlier age of Meiji era $\cdots\cdots(27)$
Literature
Anthology of Japanese Poems by Koan Ogata·····(57)

The Japanese Societ of Medical History.

 $(Department\ of\ Physyology.\ Nihon\ University.\ School\ of\ Medicine.)$

Oyaguchi. Itabashi. Tokyo, Japan.